
紅の姫君

相櫨りわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の姫君

【Nコード】

N8832E

【作者名】

相櫨りわ

【あらすじ】

ありがくこ有賀紅誇は通称「ベリーの国」に強制的に連れてこられてしまった！しかも「帰る方法はありません」ってエエ！しかもあたしは姫君です！？婚約者もいます？！えええいっただうしたらいいんですか——？！

序章（前書き）

どうもー！

初めて書いてみました！

文才ないですけどどうぞよろしく願います！

序章

「ごめんね。」

『奴』の手から救ってあげられなくて。

ごめんね。

でも僕も君を求めているから。

ごめんね。

この国に連れてきてしまつて。

ごめんね。

でもこれは運命だから。

君に逃れる術はないんだ。」

声が追ってくる。

あたしは振り払いながら逃げていた。

「どうして・・・?! どうして追ってくるの・・・?!」

あたしは叫ぶ。

「君に逃れる術はないんだ……」

「い、いやあああッ!」

叫んで、振り返ると、目の前には魔の手が……!

襲いかかってきたところで、ベッドから落ちた。

「いやああ……って、あ、あれ?」

そこは、自分の部屋。

「な、なんだあ……夢か……って!!!」

とんでもないことに気付き、携帯をバツと開く。

「夢か……じゃないでしょ!もうこんな時間じゃん!今日月曜だバカアアア!」

あたしは跳ね起き、40秒で制服に着替え、学生鞆に筆記用具とノートを押し込む。

「昨日夜更かししすぎたんだ……」

言うまでもなくそうに決まってる。

最近ビーズで遊ぶのにハマっていて、時間があればいくらでもやっている始末。

昨日も朝は起きれるとタカをくくって3時過ぎまでやっていたら、どうやら読みが甘かったらしい。

支度ができると、サンドイッチを口に突っ込み、家を飛び出す。

「いつてきますッ」

その瞬間、目の前に広がっていたのは、見たこともない草原だった。

序章（後書き）

あゝ・・・

なんとなく、緊張します・・・

第1話 知らない出会い（前書き）

第二話目ですね。がんばります。

第1話 知らない出会い

「はぁんっ?!ここどこ?!」

急いで後ろを振り返る。

が、家のドアは消えていて、代わりにあったのはまっさらな草原。ごしごし目をこすってみても家は失踪していて。

「ええっ・・・?」

嘘・・・でも目の前に広がっている世界は本物だった。

「やっときたね、ナッツの13回目の生まれ変わりさん」

凜と響いた声。

「え・・・?!」

すたっ。

目の前に何かが飛び降りてきた。

「わっ」

そこにいたのは、なにやら灰色の耳（らしきもの）が生えた、15、6才の男の人。

あたしが14だから、まあ年は近いかな?

「こんにちは?俺は狼野潤風。おおのつるふ 狼族」

「は・・・?狼族?うるふ・・・?」

一瞬理解し損ねた。

「そっ!だからこの耳、狼耳!」

「え・・・?あ・・・?は・・・え?!う、嘘・・・」

「いやほんとだし。これコスプレじゃないし。」

マジありえねえ。

「なっ、・・・あんたおかしい？」

「おかしくないから。」

「充分おかしいよ・・・？いやほんとに。というかここはどこなの？」

その潤風と名乗る青年は、髪の毛がふさふさ生えた頭を引っ掻く。
多めの銀髪がきらきら光ってとても綺麗。

「ここ、ベリーの国」

「・・・・・・は？」

「間、あつたね」

「だって」

そんな変な名前の国が、ありますか？

そういうと、青年はちよつと微笑んで続ける。

「3個の国が合体してこの国になったんだ」

「へえ。で？そこになんであたしがいの？てか、13回目の生まれ変わりとは？」

「それはね、紅誇」

「ちよつとまった」

あたしは話を中断する。

「なに？」

「なんであたしの名前知ってんの」

「君のことならなんだって知ってる。14歳っていう事とか、それなのに身長が138センチで小さいのを気にしてるとか、体重が28キロなのがちよつと嬉しいとか」

「ちょッ！」

個人情報だよバカ！しかもなんでそんな細かい心情まで知ってるん

だ。

「ま、それは置いて、」

「置いて、って、あんたが言い出したんじゃない？」

「いいんだって。気にしないで」

いやなるし。

嫌でも気になるぞ？

みなさん、なりませんか？！

見ず知らずの男に自分の名前&体重&身長をまるつきり正しく言われて気になってしまうのは、あたしだけなんですかー！

「そっ」

「ちょ・・・こころ、よんだね？」

「いや、めちゃくちゃ声に出てたし。てか、話し進めてい？」

だいぶ気になっちゃうんですけど・・・ま、いいかな・・・。

「話は1000年前に遡るんだけど、君の12回輪廻前の女の子が、ナッツっていつて・・・」

彼の話は、こんな風に始まった。

第1話 知らない出会い（後書き）

次回に続きます！

第2話 過去と少年（前書き）

めちやくちゃです。

それでもよろしいという方はどうぞ

第2話 過去と少年

ベリーの国に住んでいたナッツは、みんなのアイドルだった。

その人気者、ナッツは、ある日人間界に興味を持った。

そして、人間界旅行を決意した彼女は、仲のよかったベリーの国の人に、もしも自分が帰ってこなかったら、自分の十三回目の生まれ変わる人が女だったらその子を自分の代わりにベリーの国に連れてきて良いと言った。

そしてその十三回目の生まれ変わりが、あたしだという・・・

「知るかつ。てことでさよなら」

聞いたとたん、即あたしは切り捨てた。

「あたし帰る」

「それ、無理」

あたしは、その言葉で固まって、ロボットみたいにギ、ギ、ギ、と潤風の方を振り向いた。

「ここにくるときに使った時空の歪みは使い捨てだから、一回使うともう何十年も現れない時があんの」

「はあ?! 知らないよそんなの! あたし今学校生活も真っ盛りで、今日の一日とかどうしてくれんの?! コンマでも打ってうちわが天井裏に座るんですか?!」

訳のわからない質問（混乱しているから）。

「意味不明だよ? てか、この話には裏話が・・・」

「ナッツ様~~~~~!!」

「え」

潤風が話そうとしたところで、うん。

上から、男の子が降ってきた。

とい
うか
・
・
・

「また、耳？」

耳が生えてる。真っ白い、猫耳。

$$\left[\begin{array}{c} \text{え} \\ \text{え} \end{array} \right]$$

「つくうくく……王子強烈なんだけど……」

「わ！潤風さん！すみません！！！」

え？

「今潤風、王子」とかいった……？

[illegible]

この少年が？！

いやちよつとまで？

も蒼くて、はああん……

違って、何言ってるの？！

だるうとか思ってたけど、なんと王子だったなんて！

二二二って、土下座した方がいいのかな？

しないと「この紋所が目に入らぬか!」とか言われる?

あ、それ違うかな？これ殿？

「すつ、すみません、ナッツ様・・・じゃなくて、えーと、お姉さん」

ボーっとしてると、その少年が声をかけてきた。

いや、正直言つてかなり萌えるよ？まだ8歳くらいで童顔で、中性的な顔つきでその上超美形だし、かわいいし、変声前の高めのテノールとかめっちゃ萌えメーターにくるよ？

てかいま、お姉さん言われたよね？

こんなかわいい子にお姉さんなんていわれて、呼吸困難になりそう。つて。

その前、様付けされてなかった・・・？

ナッツ様・・・つて・・・。

「え・・・？」

「お姉さん。突然のご無礼をお許してください。僕はこの国の正統王位継承者、ココです。以後お見知りおきを。お姉さんのお名前は・・・？」

せいとう、おういけいしょうしゃ・・・

すごい。

「あ、あたしは有賀紅誇、です。よろしくお願い、します」

「クコ？いい名前ですね。まさにナッツ、みたいな感じの」

「え？あ、でも木の実のクコじゃなくて、くれないにほこる、つて

書くんですよ？」

「いいじゃないですか。ナッツ様は紅がお好きだったそうですし、とても誇り高かったといわれています。それと、僕に対して敬語、いりませんよ？」

「え、そう？」

「はい。それに貴女は」

そこで少年はふつと頬を和らげる。

「・・・ナッツ様にそっくりなんですよ？」

「・・・・・・・・・・えーと？」

いきなり言われて、啞然としたじゃん・・・。

てか、そのナッツって言う人・・・1000年前のあたしは、どういう地位にいたのかな？

さっきからなんだか、王子様に様付けされてますけど？

「・・・・・・・・・・えー・・・と？」

キラキラした蒼い瞳であたしを見つめる彼は、とてもかわいかった。

第2話 過去と少年（後書き）

文才ねえ！

中途半端な終わり方でごめんなさい・・・

第3話 今明かされる過去との繋がり（前書き）

またもや短い・・・

第3話 今明かされる過去との繋がり

「その薄紅色の髪、染めてないでしょう？」

「えっ、あつ、これは、ちょっと白で薄めてるよ。これ取ると濃いピンク色になっちゃって校則に引つかかるから目立たないくらいにしてるんだけど、これでも限界で・・・でも元は真っ赤だった。プール行つてたから脱色しちゃっただけで」

「わぁ！」

興奮気味に彼は言う。

「ほ、本物の紅髪なんですか?! す、すごい！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はん？」

今気付いた。

「潤風、消えてる・・・」

「え? ああ、彼は自分が相手にされなくなると、すぐに消えちゃうんです」

少年は、さもなんでもなさそうに言う。

「へ、へえ・・・」

「あつ、そう、それに、ナッツ様とお姉さんは、すごく似てるんですよ? まず初めに、ナッツ様の生まれ変わりは皆身体づくりが左右正対象なんです!

いわばシンメトリーで、心臓の位置も胸の真ん中であって、血管も

左右鏡置いたみたいに正対象で、それこそ毛穴とか、筋肉のつき方だってシンメトリーにできてるんです！」

「………すんご」

外見はともかく、心臓が真ん中にあるってどうなの。しかも毛穴とか血管とか筋肉が左右正対象って怖くない？！
怖いよな？！

我ながら恐ろしいよ！
てかほんと？！

「すごいですよねー……あーあと、貴女、ナッツ様に顔もそっくりなんですよー！これ見てくださいー！」

そういつて彼が差し出して来たのは、古びた一枚の紙。
そこに描かれていたのは……

「………あたし？」

あたしそっくりな人。

でも、ココ君は笑って首を振る。

「そう見えるでしょ？これ、ナッツ様です」

確かに普段見慣れているあたしとは違う。

スケッチされてるナッツって言う人は、髪も長いし澄んだ紅色だし、着てる物だって女王様みたいな紅色のドレス。

でも、数年前のあたしなら、髪もこの色とまったく同じだったし、長かったし、七五三のときならこれにそっくりだっただろう。
それこそ見紛うほどに。

「ナッツ様は、この国を出ていなければ、」

彼の話は、こんな調子に始まったのだった。

紅の姫君、ナッツは、白の領域の王子、カシューとの結婚が決まっていた。

でもナッツにはもう恋人がいて、それは黒の領域の王子、フルーツだった。

姫は政略結婚に身を委ねることが一番嫌いで、真夜中に姫をさらいに来たフルーツと一緒に、黒の領域に逃げてしまった。

カシューとの結婚を振り切り、フルーツの婚約者となったナッツは、あるとき人間界旅行を決意した・・・

「・・・で、決意したナッツ姫はフルーツに言いました。自分はどう帰ってこないかもしれないけれど、もしも帰ってこなかったら自分の13回目の生まれ変わりと代わりに結婚して良いと」

第3話 今明かされる過去との繋がり（後書き）

じゃ、やっと登場人物の紹介でも。

今回は紅誇で！

有賀紅誇

14歳

血液型・O

あまり細かいところまではこだわらないけど、基本常識があるため、この世界の人々によく心の中とかでツツコミを入れる傾向がある。
好きな物は猫と紅茶で、嫌いなものは極度の非常識と晴れの日と葡萄（嫌いなものが微妙なんだけどこれは何？）

次回は潤風です！

第4話 4歳下に攫われるってええ！（前書き）

なんか毎回毎回無駄に短い気がする・・・

第4話 4歳下に攫われるってええ！

今あたしは、広いお城の中にいる。
そして今までの不可解なことを回想中。

「ちなみに、カシユっていうのは1000年前の潤風さんで、フルーツっていうのは1000年まえの僕ですよ！」

「で？あたしがその13回目の生まれ変わり……ってことは・
・！……！」

とんでもないことに気付いた。

「お姉さんは僕の花嫁です……！」

「え、え、え、えええええ……！！！！！！！」

「もちろん18になるまで待つてもらわないとですから、10年後になっちゃいますけど、王家なら12歳で結婚できるようになります！それなら4年後ですむし、長くは待たせません！だから、ね？僕と結婚してくださいね？」

この年でプロポーズ……って、そうじゃない！

ツッコむべきところはそこじゃないだろう！

いや、年下はタイプだし、別に構わないけど、いや構うけど、法律も無視だしそのうえ……

「……ベリー国永久住在……？」

「当たり前です」帰らせませんか！ていうか、帰れません。時空の歪みなんか、そうそう現れるようなものじゃありませんから！」

「え！こまる！それは！！家のご飯・・・じゃなくて、中学校生活と家族の時間がもつとほしかった！」

「それに」

ちよつと翳った笑顔で（あたしの発言を無視して）ココ君は続ける。

「元の世界に帰れたとしても、元の世界の住人はあなたのことを忘れていきます」

「・・・え・・・？」

「時空の歪みに巻き込まれた人のことは、自動的に記憶やデータから撤去されてしまうんです。それに、そのことについては僕らベリ一人にとつても人間さんにとつても、対処しきれない問題なんです」

「そ・・・んな・・・」

あたしは啞然とした。

え、ちよつとまつて？

じゃあたし、帰れても自分の居場所がない・・・ってことだよね・・・？

それにそれは、ココ君でも潤風でも対処できないことで・・・

ってことは、

選択肢は一つ。

「諦めましょう」

につこり笑っていいましたとき。

だって、しょうがないじゃないですか。

帰れないんだから！

「いいんですか？」

驚いた顔でココ君はあたしを見つめる。

「うん。だって、しかたないじゃん」

つていうと、彼は破顔一笑してあたしを見つめた。

「じゃ、攫ってもいいですねっ」

「え」

いったとたん彼はあたしを抱きしめて空に飛び上がった。
もちろん横抱き（お姫様抱っこ）。

「わっ！！」

あたしが奇声を上げると、彼は笑ってあたしのほうを見た。

「大丈夫です。お姉さんがちゃんとつかまっててくれれば落ちません。多分」

「曖昧イイイイイイツ?!」

絶対落ちたくなかったので彼の首にしっかりと抱きついた。

彼が「お姉さんってかわいいんですね」とかいった気がするけど、スルーってことでええええ！

回想終わり。

で、攫われてここに到着したのだった。

ココ君は今あたしの良いドレスを探しに行ってくれている。
なんでも「プリンセスがその格好じゃダメですよ!!」っていうこと
とで。

でもだからって、玄関ホールにあたしを放りっぱなしにすることはないと思うのよ……！
無駄に広い玄関。

アニメとか本とかでしか見ないようなバカでかい扉。
壁に彫りこまれた見事な装飾。

こんなお城の中で、あたしはやっていけるのー?!

第4話 4歳下に攫われるってええ！（後書き）

前回の紅誇の紹介に体重と身長を入れ忘れたので、それも兼ねて潤風とココの紹介を！！

付け足し

紅誇の体重：28キロ

身長：138センチ

狼野 潤風 おおのしめい

15歳

血液型：A

基本的に自由な性格だけど、ときどき細かいところで几帳面になる。狼耳が生えていて、1000年前は白の王子。

好きな物は肉と紅誇で、嫌いなものはハエととうもろこしとベリーの女王様（後述）（バカ！女王様を嫌いなものベストに入れるんじゃない！：紅誇）

身長：178センチ（高ッ：紅誇）（お前が低いんだろ）（どっちもどっちですよ：ココ）

体重：62キロ（重ッ：紅誇）（お前が軽いんだよ）（またこれエ？！：ココ）

ココ＝ナツ・パーム

8歳

血液型：A

いつでも敬語で優しいベリーの王子様。1000年前は黒の王子。紅誇の婚約者。

たまにキザで意外と力持ち。猫耳&猫尾が似合う。

好きな物は紅誇とマタタビ（猫かッ：紅誇）（猫ですよ）。嫌い

なものは辛いものと苦いものとすっぱいものとしょっぱいもの（い
つも何食べて暮らしてんの？…紅誇）（甘いものですッ）

身長・110・3センチ

体重・23キロ

どうもありがとございましたッ

第5話 CASTLE（前書き）

いつもより多少長いかもですゝ

そしていつもより多少サブタイトルが本編に関係しています

第5話 CASTLE

とた、とた、とた、とた。

向こうのほうから彼が駆けてくる。

ああ、彼はいったいどれだけの長い距離を走ってきたんだ？！

「はあ……準備、できました。お姉さんの部屋も用意できて、中にドレスも置いてきたのでいつてみてください！」

息切れしてる彼が一生懸命言ってくれる。

今はそんなに感動できるほど余裕ないんだけど……

「ほら、ついてきてください」

彼はスタスタ行ってしまうから、ついていく。

通り越す部屋や廊下のすべてが紅と白のドット柄。

目が痛くなりそうだけど、たまにある優しいピンク色の模様で助かる。

壁にはたまに肖像画が……

「……ん？」

あの肖像画……

「ねえ、ココ君、あの肖像画は何？」

「え？ああ、あれはナツ「やっぱ言わないでエエ……」」

ああ、危ないところだった。

まったく、なんであんなところに『あの人』の肖像画掛かってんの

？！

意味わかんない！

どんなアイドルだともう。

「はい、つきました」

とかいって、彼が立ち止まったのは他の扉より一際大きくて一際豪華で、丁寧に、精巧に作られた扉。

「え．．」

「いいですよ？はいって」

その扉にもやっぱり玄関にも付いていたような小さい扉が下のほうにくっついている。

その扉を開けると．．．

「．．．．．．．．．．．．．．．．．．．．！！！！！！」

絶句した。

豪華すぎる。

部屋の真ん中には金の装飾が施された天蓋つきのベッドがドーンとおいてある。

絶対キングサイズだなあれ。

部屋の壁にはもう、これでもかって言うくらいの金と銀がふんだんに使われていて、天井には夜空の模様。
ん？ちよつとまった。

あの夜空に輝く星．．．．

全部．．．．．

宝石？

「どんだけ……」

I・K Oさんみたいなツツコミが出てしまった。

いやでも、金や銀を惜しみなくここまで使うことからしておかしいけど、宝石までも使っていたとは。

しかも床は全部綺麗な薄紅色の大理石。美しいマーブル模様を描くその石に、ときどき直径センチほどの大きな宝石が埋め込まれていた。

「でかい」

おかしいだろ、いや本気で。

というかこの、部屋を紹介するためのナレーションがあからさまに登場人物紹介よりも長いのもおかしいけど、それくらいしないと説明できない煌びやかさなんですよお（泣）

「気に入りましたか？」

にこりと笑ってココ君は言う。

いや、そりや気に入らないほうがおかしいけど、生活水準のポイントがズレてるんだよおおおお！！！！

「は、はい……」

絶対おかしいか思いながらもあたしの口は勝手に答えを返している。

「そうですか。それは良かった」

にっこりと顔を綻ばせるココ君。

か、かわいいんだよ……！

母性本能刺激すぎ。

「あ、お姉さん、ベッドの上にドレスがおいてあるので着てください

い！僕もちよつと着替えてくるのでそれまで待つていてくださいね
♪あと、メイドのティアラを外に配置しておきますから、着れなかつたら呼んでくださいね！」

「は、はい・・・」

それだけ言つと、彼は部屋から出て行つてしまった。

あたしはしばらく呆然としていたけれど、ふと我に帰つてベッドのほうに歩き出した。

「質いいなあ・・・」

ベッドは最高級のシルクでできているようだった。触り心地が良すぎて、この中に寝ることさえもためられる。

ということで、ベッドにはあまり触らないようにしながら深紅のドレスをもった。量はあるのに、羽のように軽い。

それを広げてみると・・・

それはレースと絹を何重にもしてリボンを大量にあしらつたお姫様ドレスだった。

がんばつて、着てみた。

シルクが滑つて着にくかつたけど、がんばった。

付属の白いこれまたシルクと宝石の使われた肘上までの手袋もした。ドレスとは対照的な真っ白い純白の高いヒールも履いた。

「こ、これは・・・！」

胸と鎖骨と背中と肩が大幅に出る、紐のないドレスだった。

「ギヤアアアアアア！！」

乙女にあるまじき悲鳴とともに、あたしは鏡の中の自分から目をそらす（てか、後ろ向いた）。

「ヘルプミー！！ティアラさん、ヘルプミー！！！！」

ほとんど半泣きでした。

だって・・・！

こんなドレス着れないから似合わないから笑われるからかわれるから赤は嫌いだから（最後のは嘘です）。

パン！

ドアを開けて飛び込んできたメイドさんは、うさ耳が生えていました。

第5話 CASTLE（後書き）

紅誇、大変ですねえー（酷い作者）

そしてまた、新しいキャラが出てきたので先に紹介を〜

ティアラ・クラウン（・・・王家の人なの？：紅誇）（まさか、紅誇様、ただのメイド風情ですわ）（それにしてはなんだか名前が・・・：紅誇）

14歳（同年齢?!：紅誇）

血液型・A

うさ耳メイド。絶世の美女で超かわいい。髪の色はピーチイエローで耳は白。瞳の色は薄いピンクで、器用。

好きな物はキャロットパイとアップルパイ。嫌いなものは虫とか虫とか虫とか。

身長・142センチ。意外と低め（ちょっと待て。ティアラが低めだったらあたしはなんなんだ？：紅誇）（おチビさん♪：潤風）（黙れこの墮天：紅誇）

体重・32キロ

属性は、どちらかといえばMな方。（いるのこの属性紹介？：紅誇）（ほっといってください・・・：作者）

以上！よろしくお願いします！

第6話 振り回されました・・・（前書き）

今回もまた・・・脈絡のない・・・

第6話 振り回されました・・・

「うさ、みみ・・・」

あたしはへたり込んでしまった。

この国の人獣には、あんまり常識的なのがない。

その入ってきたティアラっていうメイドさんはあたしを見て薄いピンクの瞳をキラリと輝かせた。

「まあ、紅誇様、とても似合いますわ！ー！！」

・・・・・・・・やっぱり・・・・・・・・

「どういたしました？何か気になる点がありましたか？」

「は、はい・・・なんなんですかこの超ヒラヒラの姫ドレスは・・・露出度高めですよ・・・」

「まあ！」

かわいらしいメイドさんはもとも大きな瞳をパツチリ開けて驚いたような声を出す。

「とってもキュートでセクシーでかわいらしいじゃないですか！」

・・・・・・・・吹いた。

「あの・・・キュートならまだわかるんだけど・・・その後の・・・セクシーって何・・・」

「性的な魅力のあるさまですわ」とても女の子らしくて可愛いですわ！」

「いやそれはわかるんだけど・・・」

あたしはカジュアル派のほうがいいのよ！

しかもこの国の人ってば常識なさ過ぎじゃない？！どんな生活してたらこんなに常識がなくなるんだ？！

もうすっかり氣力を失ったあたしは心の中でツツコミまくるしかなかった。

「あつ！紅誇様！その後ろのリボン・・・」

ティアラさんが手を伸ばしてくる。

あたしがされるがままになっていると、リボンを結びなおしてくれた。どうやら少し曲がっていたらしい。

「あ、ありがとう」

「いえいえ。わたくしはメイドですから」
いい人だなあ。

ここに来てひさびさ（初めて？）に思った。

「あつ！ココ様がきてしまいました！もう少し一緒にいたいところでしたが、仕方ありませんね！ではごゆつくり！」

「え、ちよつとおい！放置プレイかアアア！！！」

前言撤回。なにが『いい人だなあ』だよ！なにやら寂しげに放置されたじゃん！

あたしこの格好でココ君に会うのいやだああああー！！

という心はまあ当然のように無視され、彼女と入れ替わりにココ君が入ってきてしまった。

「わあ・・・！！」

「いやです・・・みないで・・・貧乳のあたしを見ないでください・・・」

「何言ってるんですかお姉さん？」

いつの間にか横に来ていたココ君が手を差し伸べてくれる。

「お姉さんはとっても綺麗ですよ……?」

涙でそう。

なんでそんないいセリフ堂々と照れずに言うの?

あたしは恥もすっかり消え失せた顔で差し伸べてくれた手につかまる。

ずっと立って、初めて彼の姿をしっかりと見た。

あたしより少し小さい彼は黒いタキシードを着ていて、とてもかっこよかった。

てか、かわいい。

なんでそんなにかわいいの?

弟にほしいよ?

そんなことを考えていると、彼はあたしの手を引く。

「え……?」

「おねえさん。一緒にダンス、踊ってください。今夜、ダンスパーティーなんですよ。これからその用意しますから。それ衣装合わせなので脱いでください。で、今日はちょっと大忙しです。まずはとりあえず、エステから行きましょう!」

「は、え、ええ……?!」

そうしてあたしは彼に二度も攫われたのでしたとさ!

その日の夕方。

あたしはこう心の中で訴えている。

『この城の中、広すぎです……！！！！』

だって、本当なんだよ？！朝っぱらからどこに攫われるんだか思
つてたら全部城の中なんだよ！おかしくない？！この状況、おか
しくない？！

高級エステも 化粧品展みたいに化粧品がむやみやたらと置かれた
化粧室も コロン置き場も 高級リゾートとかに行ってもないよう
なお風呂も 美容室もみんなみんな城の中にあるの！
ぜってーおかしいだろ！！！！

って言いたくなるような一日だった。

「さ、次で最後ですから頑張つて。今お姉さんはとても綺麗です」
ふらふらのあたしをサポートしながら、ココ君が元気付けてくれる。

「つ、次は何……？」

あたしが問うと、彼はふっと笑って答えた。

「ドレスです」

「………え？」

だってさっき『衣装あわせ』とかいってあの無駄に露出度の高いド
レス着せたじゃん。

そついうとココ君は困ったように笑った。

「あれはただサイズを測るためのものですよ。本当のダンスパーテ
イにあんな軽い普段着用のは着ていけませんから」

「え？！あれ普段着なの？！」

「そうですよ……ほら、着きました。衣裳部屋です。」

彼は比較的小さめなドア（このお城の基準。本当は縦が2メートルくらいあるバカみたいにでかいドアです）をあけた。

「わ」

中には、色とりどりのふんわりしたドレスがたくさん置かれていた。見ただけでその光沢やらなにやらから、いい素材なのがわかってしまふ。

「何驚いてるんですか。ここは普段着用の部屋ですよ」

「ああ、いいなあ。あのマーメイドスカート・・・」

部屋の端にある比較のおとなしめな青いスカートに目が止まる。

「いけません、あんなの。あれは町におりていく時用ですから」

「嘘ッ！あんなの着て町に下りんの？！」

十分派手なのに・・・ノリで涙が出そうになる。

奥の奥の部屋まで進んできた。

「うわ」

今まで見てきたのとはぜんぜん違うすごい、言葉では説明しきれないようなスカートが大量に並んでいる。

「ココ君・・・聞いていいかな。」

「はい？」

「此処って紅いスカートないよね？」

「はい。ありませんよ。紅い衣装はすべてもうひとつ先の部屋にあります」

いやだから、どんだけ広いんだよ。

おかしいだろ。もう部屋二つ通過したぞ。しかもめっちゃでかい部屋。

あの、外国に時々あるような学園の大食堂くらいの。あ、理解できない？作者に言って・・・

とか何とか言ってる間に、もうひとつ奥の部屋までついた。入ったとたん、

眩暈がした。

すべてが赤で統一されている。

目が痛くなるその部屋には、紅色の衣装しか置いてなかった。

「ねえ、ココ君」

「はい？」

「目が痛いんだけど」

「僕もです」

おいおい。

でも、それは気にせずに（自由の国ヒャッホー）、彼は紅色の衣装を選び出す。

「用意しました。これ、更衣室で着て来てください」

押し付けられた衣装はやっぱり滑った。

「わわわっ」

シルク使いすぎですっ！

更衣室に行ってみると、中にはたくさんメイドさんが待ち受けていた。ティアラの姿もあった・・・！

10分くらいで着せられた。

中に入ってきたココは、何故か感嘆の声を上げる。

「わぁ・・・！！！！！！す、素敵ですよ・・・！」

あたしはどこがこんなにすごいのか、自分の身体を見回す。

「鏡、見てください」

そういえば今日、ココ君ったら一回も鏡見せてくれないんだよね。思いながら鏡を覗き込んでびっくりした。

「これが・・・あたし・・・？」

そこに映っていたのは華麗で繊細で美しい乙女。

いつもの気性の荒さはどこへやら・・・

「す、すごい・・・女は化けるね」

「そんなことありませんよ！お姉さんはもともとが綺麗ですから」

「またそんな。誉めても何もでないからね？」

「そんなの期待していません。僕がほしいのは貴女ですから」

ばーん。

心臓を撃ち抜かれた。

同時に思った。

「キツザ〜〜……………」

彼のキザさを初めて知ったときだった。

「さ、行きましょう。馬車はそんなに待ってくれませんから」

まだ心臓を押さえているあたしをさっとお姫様抱っこして、ココ君はまたもやあたしを攫ってしまった。

外には、真っ白な馬車が待っていた。

ところどころ金の装飾がされていて、とても美しい。

苦勞して馬車に乗り込むと隣の小さな王子様がこちらを向いてそつと微笑んだ。

今夜はいいダンスパーティーになるといいなあ・・・

第6話 振り回されました・・・（後書き）

今回は特に新登場人物などいないので紹介はカットです。
すみません・・・後半なんか特にめっちゃめっちゃで・・・

第7話 ダンスパーティー（前書き）

いよいよ紅誇初めてのイベントです！

第7話 ダンスパーティー

あの、ちょっと誰か、この状況からあたしを救い出してください。
あ、すみません。訳わからなかったかな。

いま、超でかいお屋敷みたいなのこのまん前にいるんです！
しかも今横をクイーンみたいな優雅な女性が通り過ぎてゆきました！

「ちょっと・・・ココ君、あたしってたった今、ここにすることが
おかしいんじゃない？」

「何言ってるんですか、お姉さん？お姉さんは今この国のプリンセス
なんですよ？そんな大富豪がここにいておかしいわけじゃないでしょ？
他の人みんな公爵とか子爵とか、そういう位の人たちばかりなんです。
みんなより1つ位が高いのに、場違いなんて言わせませんよ？」

「ええ・・・」

そうは言われても、こんなすごい気位高そうな人たちがばかりいる
ところで馴染めないでしょ！！！！

中に入ると、やはりすごい。

豪華絢爛で天井の高い大広間に人がわんさかいる。
しかもみんな素敵な人たちばかり！

「ココ君、やっぱりあたし場違いです」

「いえだから、素敵なレディですってば。何が場違い。一番輝いて
いますよ？」

なんでそんな素敵なセリフをさらりと言ってくれちゃうのかなあ？

「プリンセス。貴女がナッツ様の13回目の生まれ変わりですか？」
「は？」

突然声をかけられた。

「だ、誰・・・？」

「おっと。すみません。わたしはアーモンド。公爵家の末裔です」
被っていたシルクハットを恭しく胸の前に持っていていきながら彼はお辞儀をした。

「は、はあ・・・あ、あたしは有賀紅袴です。え、えーと、よろしく、アーモンド公爵」

それに返すようにあたしも、ぎこちなく見様見真似でドレスの裾をそっとつまみ、片足を引いて会釈してみた。

「お久しぶりです、公爵」

ふとココ君が出てきて、アーモンド公爵にお辞儀をする。
すると公爵もあたしの時とは打って変わった自然なお辞儀をココ君にする。

「これは王子。お久しぶりです」

「・・・知り合い？」

ココ君に耳打ちするとココ君はうなずいた。

「一応王家と公爵家はもともと交流しやすい家柄同士ですから。公爵は僕の昔からの知り合いです」

そのあと、アーモンドは（本人の要求により呼び捨て）しばらく一緒にいたけど、ヘーゼルっていう公爵家の娘さんに「シャル・ウィ・ダンス？」って誘われて行っちゃった。

それを境にしたようにココ君がずっと立ち上がり、手を伸ばす。

「僕たちも踊りませんか？」

一応人間界では社交ダンスを習っていたけれど、こういう場に出てくるとなんとも自信がない。

ココ君は「平気です。たいしたことはありませんよ」といったけれど・・・。

案の定、一曲と半分も踊ると息切れが激しくなった。

何しろ相手が小さくてかわいいし（何の関係が？）身体を密着するから動悸が（いやだから、何の関係が?!）。（イヤアアア!この書き方やめて!あたしがなんだかオタクみたいな表現になってるウウ!!!）

「大丈夫ですか、お姉さん」

肩を支えながらココ君が心配してくれる。

「カクテル、いりますか」

「ノンアルコールなら・・・」

「ありますよ」

ココ君があたしの要望にこたえて綺麗な色のカクテルをくれる。

「フルーツカクテルです」

コップに入ったそれは、綺麗な透き通ったオレンジ色をしていて、一気に流し込むように飲み込むと喉の渇きが一瞬で潤ったのを感じた。

そしてそこから、あたしは記憶が残っていない。

ココside

お姉さんに僕は、オレンジ色の透き通ったノンアルコールのカクテルを渡した。

それを飲んだとたん、お姉さんはあっけなく酔ってしまった。

「なっ」

すぐにお姉さんの手からグラスを奪い取り、匂いを嗅ぐ。

猫の鼻が間違えようもない、これはフルーツミックス・ジン!

「強いお酒じゃないですか・・・!」

どうやら隣にフルーツミックス・ノンアルコールカクテルに似たこのお酒があつて、間違えて渡してしまったようだ。

「困ったな・・・明日お姉さんの悲鳴を聞きたくないから早く帰っ

てリブルに魔法をかけさせないんだけど・・・生憎馬車も時間が来ないと来ませんし・・・どうしたらいいでしょうか・・・」

僕がお姉さんを抱いておるおろしていると向こうから公爵がやってきた。

「あ、公爵・・・！」

僕は今、藁にもすがる思いだったから、公爵を呼んだ。

「公爵・・・！」

「ん？どうしましたか、王子？」

「お姉さんが、紅誇がジンを飲んで酔ってしまったんです」

「あちゃあ〜」

彼は頭を抱えた。

「そのジン、注文したの俺だよ」

「口調、戻ってます」

「ハッ」

口をぱつと押さえて彼は僕のほうを見る。

「コホン、仕方ありません。家ならすぐ近くですから、泊まって行ってください。家まで来れば救護とかも呼べるでしょう」

「いいんですか。そちらがいいのならこちらも」

「ええ」

そんなこんなで、一晩だけ部屋を借りることにした。

さすが公爵だけあって、家は城ほどではないにせよとても大きい。

「しかし、本当によかったのですか。もっとパーティを楽しんでもよかったのに」

「いいんだよ。明日は俺も紅誇と遊びたいしな」

もう彼の口調はすっかり元通りだ。

「さ、この部屋一晩使っていいから、紅誇を寝かせて。俺は救護を呼んでおくよ。城付き魔法使いはリブル、だっけ？」

「はい。あと、僕の雇っているメイドのティアラに着替えを持って付いてくるようにと」

10分後、リブルとティアラは公爵邸に到着した。

「お待たせいたしました、ココ様」

「大雨が突然降ってきて、大変でしたの」

リブルは王室付きの12歳の魔法使い。若いけれど腕は一流だ。

箒を肩に担いで黒いマントに三角帽という姿はいかにも魔女っ子。

ティアラはといえば城のメイドが着ているいつもの韓紅色のエプロンドレスを着て、恐らくお姉さんの着替えが入っているであろうバスケットを抱えて頬を高潮させている。

「ご苦勞様でした。いきなりで申し訳ないですが、リブル、お姉さんがジンで酔ったんです。直せますか？」

「もちろん」

はきはきと自身ありげに言う姿はなんとも頼もしい。

「それからティアラは、その後のお姉さんの看護を任せます」

「責任を持ってしっかりとお世話いたします!!」

こちらはやんわりとしながらもしっかりしている。

「では、よろしく頼みました。僕はこの部屋の仕切りの向こう側にいますから、何かあったら呼んでください」

「はい」

それだけ言つと、僕はカーテンで仕切つてある部屋の向こうに行つた。

「うまくいくといいんですが……」

彼女が目を覚ますのは、次の日の朝……

第7話 ダンスパーティー（後書き）

2人出ました。でもちよつと時間がないので今回は公爵だけ・・・

アーモンド・ピスタッチオ・ナッツ

18歳

血液型・O型

公式な場では丁寧な言葉遣いなのに、普段は「俺」とか「だよなー」とか、結構乱暴な表現が多い。よく家の中でお菓子を焼いてホームパーティをしている。

紅誇に興味がある。

最近のお気に入りにはスコーンと胡桃パイで得意な料理はバナナ丸ごとエクレアと生チョコケーキ。

身長・185センチ（高くてね？：紅誇）（彼は異常ですから：ココ）
体重・？（俺ってよくお菓子食うだろ。だからよく重くなったり軽くなったりするんだ）

一応、次回は優雅な（？）ホームパーティーです。（の予定。）

第8話 ホームパーティー（前書き）

今回はいろんなキャラが出てくるのであとがきが長くなります。

第8話 ホームパーティ

目覚めは爽快だった。

「う・う・ん・・・」

あ、あれ？ここはどこだ？

「えっと・・・」

覚えている記憶を振り返ってみる。

つと、昨日ダンスパーティーに行つて、疲れたあたしにココ君がノンアルコールのカクテルをくれて・・・そこから記憶がない。

「紅誇さま！」

聞きなれた声。

「え・・・？」

部屋に入ってきたのは、うさ耳の生えたメイドさんだった。

「ティアラ・・・？」

「はい！ご気分いかが？」

「いいけど・・・なんでここに？てか、ここどこ？」

ティアラはにつこりと満面の笑みを浮かべて教えてくれる。

「ここはアーモンド公爵様の公爵邸ですわ！昨日紅誇さまはココ様の渡されたジンを飲んでひどく酔っ払ってしまい、アーモンド公爵様が一晩だけお部屋を貸してくださいだったのです」

「え、あれってノンアルコールのフルーツカクテルじゃなかったの？」

そうきくと、彼女はちよつと困つたように顎に手を当てて微笑んだ。
「細かいところまではよく知らないのですが・・・ココ様を呼んできますね？紅誇様が目を覚ましたら呼んでと言われましたので」

「う、うん」

そういうと、彼女はパタパタといなくなってしまった。

「お姉さん。おはようございます」

カーテンを開けて入ってきたココ君はひどく眠たげな顔をしていた。
「眠そうだよ？大丈夫？」

心配して聞くと、彼は首をそつと振った。

「平気です。ただ、お姉さんが明日の朝二日酔いで頭痛くなった
りすると可哀想だと思っていたら一睡もできなかったというだけで
すから」

「なにそれ！重症じゃん！ダメだよつと寝てないと！」

「いえ、平気です。城に帰ったらしっかり寝ますから」

「あ。紅誇、おきたの？」

「え？」

第三者はアーモンド公爵だった。

「あ、アーモンド！昨日は部屋を貸してもらっちゃってありがとう
ございました！」

「ぜんぜん構わないぜ？」

「え・・・？」

この人、ほんとにアーモンド公爵？

「ん？どした？」

「言葉が・・・アーモンド公爵・・・」

「ああ、これ？これがいつもの俺。ああいう正式なところじゃちゃ
んとした言葉遣いしてるけど、普通こうだから」

「へ、へえ・・・」

「あ、そうそう、今日ホームパーティに来ない？」

「え」

「いいんじゃないですか、お姉さん。今日は一日僕も寝てしまおうでしょうし、城の外の人とも知り合えるチャンスかもしれませんよ?」

「まあそれもそうだけど・・・」

まあいいか、と思って微笑ってうなずいた。

「さ。大丈夫? 紅袴。もう少しだからがんばって」

いま、あたしはアーモンドと一緒にホームパーティへの道のりを進んでいる。

でも、どう考えてもおかしい。

もう公爵邸を出てから小一時間経つはずなのに、まったく着く気配がないのだ。

「と・・・遠いんだよバカアア! ちょっとアーモンド、なんでこんな遠くでお茶会ひらいてんの?!」

「どうせならオーシャンビューのほうがいいだろ」

「そこだけかつこつけてんじゃねえええ!」

けらけら笑いながらアーモンドはわざとらしく話題をそらす。

いやあなた、話題そらしきれてないよ? 話し相手の心に疑問が残ってんだよ?

「ほら、あのログハウス」

彼が指差した先にあったのは、ちよつとしたログハウス。

外には丸テーブルと椅子が何脚か並べてある。

そしてその椅子には・・・?

「・・・先客？」

そう。3人、先に誰かが来ていた。

「ああ」

なんでもなさそうにアーモンドは言う。

「あれ、いつもホームパーティーに来る奴等。ホームパーティーで落ち着くにはそれなりに覚悟いるけど、行っちゃう？」

「はあ？」

意味不明。

だからとりあえず「うん」って答えてアーモンドについていった。

ホームパーティーのメンバーは、アーモンド以外みんなあたしより年下だった。

しかも全員かわいすぎる！

「ん・・・？アーモンド、この人誰・・・？」

一番端に座っていたココア色の髪の子がアーモンドに尋ねる。

「俺よく知らないから、本人に聞いて」

するとその子はあたしのほうに向き直った。

「こんにちは、お姉ちゃん。あたしは、シロップ。お姉ちゃんは・・・？」

「こんにちは。あたしは紅誇です。よろしくね」

「え、紅誇・・・？それってあのナッツ様の生まれ変わりってゆう？」

「よくしってんな、シロップ」

「ちよつと、アーモンドは黙ってて！今はあたしがお姉ちゃんと話してるんだから、部外者は入ってきちゃダメ！」

ん？この子、意外と毒舌家？

ちなみにその子の頭には、黒い犬の耳が生えていた。

「えーと、残りの二人はなんていうのかな？」

後に残った10歳くらいの童顔二人組みは、そろって同じ顔をして

いた。

双子なんだろうな、多分、いや絶対。

「僕はモカ」

「僕はカプチーノ」

「僕ら、双子でえす」

だろうと思ったよ。

てかこの二人、珍しく髪の色が違う。モカは薄めのミルクコーヒー色だけど、カプチーノはコーヒブラウンなのだ。

それを言うと、二人は同時に笑った。

「アーモンドが区別がつかないって言うから、カプチーノの髪の色を濃くしたんだよ」

「元はモカみたいな色だったのにね」

「なんと」

こんなにかわいい二人を判別できないってどうなんだアーモンドよ。

とか思っていたら、ふいに何かが袖を引く。なんだと試みてみれば、シロップが上目遣いでこっちを見ている。うわ、かわいい。なんだその殺人的な可愛さは。

「どうしたの？」

甘い声で聞いてみたら、予想に反して彼女はすごいことを言った。

「二人は言わなかったけど、モカはS属性でカプチーノはM属性なんだよ」(笑)」

「……………はあ？」

一瞬理解しかねたけど、確かに思った。

この二人は本当に双子？って……

自己紹介も終わったところで、ホームパーティーが正式に始まった。始まったというか、自己紹介の間にアーモンドがお菓子を作ってくれていて、ちょうど終わった頃に出来上がったただけなんだけどね。

「いつもホームパーティーやるときは、アーモンドがお菓子を作るの？」

「そうだぜ。たまにシロップも手伝ってくれるけど」

「でもシロップが手伝うと時々生チョコがすっぱくなるよね・・・」

「熟成させすぎたんじゃないの？それで腐ったとか」

「えー！違うよ！ひつどおい、カプチーノ」

「その怒り顔、そその」もつと僕を罵倒して、殴って怒って蹴り殺して・・・」

「うわ、M属性！！」

「黙れこのドM野郎！てめえなんかシカトしてやる」

えちよつと、今のほんとにシロップ？！なんか黒いオーラ出てなかった？！気のせいってことにしたいいいですかアア？！

「もつともつと、罵って・・・」

と、そのとき、

ガッチャン！！

すごい音がした。

「なに？！」

「あゝあ、またやったの、コナ？」

急いで音のしたほうを見てみれば、5歳ほどの小さな男の子がいた。ネープリイエローの髪の中にちょこんと山羊の耳と角が生えている。「ごめーんね」

男の子はかるく謝るとシロップの椅子のほうに行き、シロップのひざの上に乗る。

「えゝゝゝと?」

ついていけないあたし。情けなゝゝゝ。

「この子はコナっていうの。やんちゃでおつちょこちよいだからすぐ物を壊すんだゝ」

「へ、へゝゝゝ」

シロップがコナの頭を撫でながら紹介してくれる。

当のコナは、ちょうど目の前にあつたティラミスを食べ、盛大に咳き込んでいる。

「にがゝゝい」

「あゝあ。だからティラミスは食べちゃダメって言ったのに。はい、飴ちゃん」

「あゝい。しろつぶ、すきー」

かわいいなあ。ていうか、シロップ面倒見良い。

かわいい。絵になる。ていうか、なんでこんなほのぼのしてんのこのホームパーティー?

さつきこの子ポット割つたんだよ?なんで誰も指摘しないの。アーモンドはアーモンドで紅茶の中にミルクとかたっぷり入れて最早紅茶じゃないもの作ってるし。

そんなこんなで、おいしいお菓子をたくさん食べて、あたしはお暇することにした(そんなこんなで何かあつた?)。

「また遊びに来てねゝ」

「僕らいつでもここにいるからゝ」

「楽しかったよ」

「ばいばゝい」

「一人で帰れるか?」

みんなが手を振ってくれて、アーモンドは帰路を気にしてくれた。

「うん、平気だよ。アーモンドがお城までの地図かいてくれたじゃん」

「まあ、それもそうだな」

「じゃ、ありがとうね。」

「いつでもきていいよ」

「いつでも行くよ?」

「じゃ」

「またねー、みんな〜」

あたしは手を振って地図を片手に駆け出した。

その後アーモンドが子供たちに「二人、恋人みたいな別れ方したねー」っておちよくられていたのをあたしは知らない。

第8話 ホームパーティー（後書き）

一気に5人行きます！！！！

リブル

12歳

血液型・O

王室付きの魔女。誇り高いけれど礼儀正しい。
箒で空を飛ぶ。ペットは白猫のプシー。

そのほかは一切謎。

好きな物は猫と猫と猫。嫌いなものはカラス。

身長・148センチ（まあ普通ぐらいかな：潤風）（黙れ最近出て
ないくせに：紅誇）

体重・？（彼女が体重計に乗ったとたんに体重計が壊れるんです：
ココ）（なんでえ〜？：紅誇）（え、ただだって、体重なんか見
られたくないしい・・・）

シロップ

9歳

血液型・A

面倒見のいいホームパーティーのお姉さんの存在。いつも何故かコナ
を黙らせるためにロリポップとか飴を持っている。彼女の作る生チ
ヨコは時々すっぱい。

意外と毒舌家だったりする。犬っ子。

好きな物はアーモンドの作るバナナ丸ごとエクレアで嫌いなものは
アーモンドの作るコーヒージェリー。理由はミルクが用意されてなく
て苦すぎるから。

身長・113センチ

体重・21キロ

モ力

10歳

血液型・B

S属性。虐める事がダイスキで、趣味はカプチーノ虐め(うつわ、趣味悪：紅誇)(紅誇も僕に弄りたいのかな?)(ギヤアアア!：紅誇)

好きな物はモ力で、嫌いな物はダージリンティー。

身長・141センチ(意外と高いね：潤風)(どうも)

体重・33キロ(なんで10センチも違うのに体重は5キロしか変わらないの：紅誇)(お前体重が1センチごとに1キロ変わると思うの?：潤風)

カプチーノ

10歳

血液型・B

M属性。虐められる事がダイスキで、隙あらばみんなに「いじめて」「とせがむ。至福の時は弄られているとき。体重と身長はモ力と同じ。

コナ

5歳

血液型・AB

おっちょこちよいでいたずらっ子な可愛い山羊っ子。

苦いものが苦手で甘いものが大好き。

子供なので弄られることが結構好き。

身長・95センチ(可愛くない?!：紅誇)(よかったなおソロがいて：潤風)(・・・：紅誇)

体重・18キロ(かるう!!!!：紅誇)(身長は同じなのにな：潤風)(同じじゃねえエエエ!!!!：紅誇)

はい、終わりです。たぶん明日は書かないと思いますが、どうぞ見捨てないでください。

第9話 散々な一日（前書き）

朝っぱらの出来事です。

ひさびさにアイツがです！

第9話 散々な一日

「暇～～暇～～暇～～」

恐ろしく暇。

昨日とかはちゃんとホームパーティーにも行っただし結構充実してたのに。

あたしはぶつぶつ呟いて「暇～～」を繰り返す。

「暇だなあ～～・・・」

「そんなに暇なら、俺と遊びにでも行こうよ」
「え」

あたし一人しかいないはずの大きな部屋。
そのどこかから聞き覚えのある声がする。

「ココ君・・・じゃないよな。アーモンドでもない。ていうか、何処にいるわけ？ええっと、この声は・・・」

「潤風」

「そうっ、それ!!」

「出てないからって忘れるなんてひどいね、紅誇」

すた。

目の前（てか、あたしの上）にひさびさに出番の来た潤風が現れる。

「ギヤアアアア!!どっから湧いてきた?!ていうか不法侵入なんじゃッ・・・!!」

えだって、この城の整備はどうなってる?なんでこの一回しか面識

のない狼男が何処からともなく湧いてくるんだ！

「おチビさ「チビって言うな！」んゝ俺は天井にくつついてたよ」
思いつきあたしの訴えシカトしたぞこいつ！

しかもなんつつた今この狼男！え？天井に？嘘！おかしいんじゃないの？！

「・・・・・・・・・・」

「ん？どうしたの紅誇。元気ないね」

一気に布団に倒れこんだあたしを見て潤風が言う。

元気ないですよ。あんたのせいで。

なんでこんな一気に疲れなきゃいけないの。まだ朝の8時とかなんだよ？

「・・・しかもこいつはいまだにあたしの上から退こうとしないわけ？

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・重い」

「俺が？」

さも意外そうに彼は言う。

「あたしの約二倍も体重があるのに俺が？とか聞くな。しかも重いから、マジで」

と、そのとき、ギギギ、とスプリングが軋む。

でも一向に軽くなる気配はない。

「ちよつと、早く退い・・・」

・・・言い終われなかった。

あたしが上を向いた瞬間、彼はあたしに猿轡をかました！

「んがッ！！！！」

「ごめんね。息を吸って」

言われる前にすっぺいた。

ヤバイ。そう思ったときにはもう遅くて、だんだん意識が遠のいていくのを感じる。

「……あのやろう。猿轡に薬を染み込ませたな……
そう最後に思っ、あたしは完全に気を失った。」

「んむ……」

あたしが目を覚ましたとき、そこは見たこともない湖のほとりだった。

「にやろう……」

ふつつと怒りが込み上げてくる。

ちよつと。あたしの家、何処？！

その前に、ここは何処なの？！

「コーコーくくくん！！！」

大声で呼んでもいるはずもなく。

「酷いね。俺がこのロマンチックな場所につれてきてあげたのに他の人を呼ぶんだ？」

「頼んだ覚えはない！！しかも今は連れてきたというかどうかどう考えても誘拐だぞ！」

いきなり聞こえた声に反射的に怒鳴る。いや、いいのさ、相手は潤風なんだから。もしそれが勘違いでココ君とかだったら申し訳なさ

すぎて土下座しようとも思っけど。

しかし当の潤風は無邪気な顔で首をかしげている。

「なんで？この湖にはピラニアとか大海蛇とかカンディルとかウーパールーパーとかいっぱいいるのに」

「どこがロマンチックだこのアホ！捕食されるぞお前！しかもピラニアとかの中にウーパールーパーを入れるなあああ！！」

大丈夫かこいつの頭。

いい加減心配になってくる。こいつが海蛇とかの中にジャッポーンと飛び込んで食われたら、あたしはどうやって帰ったらいいの？

「何言ってるの？そういうののなかに飛び込んで行って、捕食するのは俺」

・・・え？

なんていった今？

捕食する？生で？

「何言ってるのはこっちのセリフだアアアアアア！！！！！！！！！！」

「！！」
理性がもう限度を超してて、あたしはバイオレンスに潤風にとび蹴りをした。

「つつう・・・飛び蹴りはないだろ、紅誇・・・」

「生きてたあ——！！！！どうか捕食されてくださいあああ！！

！！！！あたし帰れなくてもいいからこの不気味な生き物に制裁を！！！！！！！！！！」

怖い怖い怖い怖い、いやだから怖すぎるって！！

と。

その間にいつの間にか彼はあたしの後ろに回りこんでいたらしい。

「えい
トン。」

「ツギアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

気付けば目の前には水面が迫る！！

後ろに行つて水際に立つてたあたしを押ししたな悪魔の子供！！！！
信じられないピラニアに食われるだろボケエエエ！覚えてろよこの
狼男地獄で後悔させてやる！！！！

「な？捕食できるでしょ、あでも、慣れてないからお姫様は捕食されちゃうほうか！ま、いつか」

絶対こいつあたしのこと姫とか思っていないよ！第一人とも思っていないよ多分！ま、いつかってどういう意味？！？

「100回くらい捕食されるこのバカ狼……！！！！！」

水面が目前に迫り来ていた。

お父さんが目の前に出てきた微笑みながら言う。

「紅誇、いい人生で終われたかい？」

正直散々でした。

脳内では”THE END”の文字がくつきりと浮かんできました。
ああもう、ダメなのか——。
もうダメ、落ちる——！

と思った瞬間、ふわりと身体が浮いた。

「た、助かった……？」

いったい何がおきたんだろう。

痛みもないし、水の冷たさも感じない。

まさかあたし、もう死んでるの——？

「お姉さん」

「え……」

目を開けてみたら、そこには愛しいあの少年の姿が！

「ゆ、夢……？」

「違います。間一髪で僕が水面からお姉さんを救い出しました」

よく見てみたらあたし、ココ君にお姫様抱っこされてる。

「無事でよかった」

にこりと天使の微笑みを浮かべた彼は、あたしの頬にちゅっとキスをしてくれた。

「いくら潤風さんとはいえ、今回のことについては許しがたいですね」

キツと潤風の方を見たココ君は、蒼い瞳に静かな怒りの炎をメラメラ燃やしていた。

「どうすんの、王子。俺を処刑してみる？」

「確かにそれは面倒くさいでしょう。ですから今回だけは許します」

「許すのぉ?!」

驚愕。おねがい、このクレイジーな狼野郎を征伐してください！

「ですが、次回は許しません。これ以上お姉さんに変なことをしたら、僕が自ら攻撃しますよ」

「はいはい、王子様。面倒くさいから今回は退散するよ。次回もよろしく、aid prince」

そういつてクレイジー狼野郎は消えてしまった。

「ねえ、攻撃するって何？」

「教えません」

「何なの？！」

「秘密ですよ」

どうしても気になったあの言葉。

訳が分かるのはあまり遠くありませんでした・・・

第9話 散々な一日（後書き）

潤風、酷いですね！！！！いくら紅誇だからって突き落とすなんて（
どという意味だおい作者：紅誇）！

ピラニアとか大海蛇とかがいっぱいいるのに！！！！

またもやココは王子様風貌でした。たまにはヘナチヨコも書かない
と、ココにキザ王子のレッテルが貼られそう・・・（困

第10話 驚き桃の木（前書き）

サブタイトルに惑わされないでください。

これから桃の木が深く関係してくる・・・とかいうことはありませんのでご安心を（なら書くな

第10話 驚き桃の木

「お姉さん、ちょっと城下町の町役場まで行きますが、一緒についてきますか？」

すべては、この一言から始まった。

お城に来てから3日くらい経ったかな。

それだけなのにあたしは何もすることがなくなって暇をもてあましていた。

いや、前言撤回。やることはある。

城の中を見て回ったり、女王様に顔合わせをしたりと、飽きることはないはずなのだが、

「だってお城の中で迷子になりそうなんだもん」

というぐうたらな理由により、部屋の中にいること3日。さすがに飽きる。

そんなあたしを見かねてか、ココ君がそう声をかけてくれたのだ。

もちろん、死ぬほど暇だったあたしは瞬時に

「YES」と叫んでしまった。

「だって、城下町なんて、楽しそうだしね」

そして、今に至る。

いま、あたしは衣裳部屋で町に出るための服を選んでいる。

「うーん・・・」

何しろ派手なやつが多くてカジュアルで地味なのがなかなか見つか

らない。

そのとき、前にあるピンクのドレスの下に茶色い紙袋が落ちているのを見つけた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・む」

開いて中身を見ると茜色の何かが入っている。どうやら洋服のようだ。

「なんだろ」

中身を開くとカジュアルで地味なちょうど探していたようなワンピースだった。

あたしとしてはワンピースよりズボンを志望なのだけどココ君が派手なドレスに変えかねないから、まあこれで我慢しますよ……。

「お姉さん。もっと素敵なのがいくらでもあったでしょうに」

「だってみんな目立ちそうなのばっかじゃん」

「それはプリンセスなのだから当たり前ですよ。さ、そろそろ行かないといけません」

作戦成功！

ハデハデなドレスを着なくって済んだ！！

「ぜえ、はあ、ぜえ、はあ……………」

おかしい。非常におかしい。

何を考えているんだ。

え？何がそんなにおかしいのかって？

そりゃまあ…………

門までの長さよ！！！！なんでこんなに長いの！

しかも、その構造もよ！

いやね、庭とかにあるガーデニングの芸術点については認めるよ？
かわいい動物とかの形を模った葉っぱとか、高度に複雑な模様をお
花畑で作ったとか、そういうのはすごいと思うよ？

でもさあ……

そっこののが全部迷路みたいにすごい複雑な道のりだったらどうす
る？ 啞然としません？

しかもその迷路みたいのが、入り口から出口までの距離としてはほ
んど500メートル、道のりとしては実に1〜2キロとかあるん
だよ？ いや、比喻的表現とかじゃなくって実際にね？

「あ……あと……ど、どれくらい……あるの……」
息を切らせながらココ君に聞いてみる。

ぱあっと華を咲かせたみたいな笑顔でココ君は振り向いてきた。か
わ……い……い……

「あと200メートル前後です！ 大丈夫、確実に出口に向かってい
ますから！！！」

いやいや、向かっていなかったらどうするんだよ。あたしの足、も
う長くは持ちませんで。

奇跡が起きた。

「う……ん……」

あと100メートルくらいというところで（同時にもうあたしの足
が壊れる直前というところで）草の前で悩む兵士をあたしたちは見
つけた。

「どうしたんですか、ロイヤル」

「あ、お、王子……」

顔が蒼ざめている。何かとんでもないことでもやらかしたのだろうか。たとえば、間違えて壁になっている草をCUT!!!してしまっただけか！

「じ、実は、此処の大切な垣根を間違えて刈ってしまったのです」

軽い気持ちで当たった――！！！！？？？

目が飛び出そうなたたしを気にせず、ココ君はそのロイヤルさんになにやら渡していた。

「こ、これは、王子……！」

驚いた顔でロイヤルさんはココ君の顔を見た。

「名誉殊勲賞です、ロイヤル。あなたはここにおいて姫の足を救いました。ほら、お姉さん。ロイヤルのおかげで近道ができましたよ」

「え！マジで！助かる！あ、ありがとうございます、ロイヤルさん」

」

あたしがお礼を言うのと驚いた顔で固まっているロイヤルさんは無意識にお辞儀をしていた。

「気にすることはありませんよ、お姉さん。彼は名誉殊勲賞授与の嬉しさのあまりに固まってしまっただけです。あとは自分ですごくにかするでしょう」

「う、うん……」

あたしはちよつと呆然としたまま、目の前に突如開けたとてつもなく大きくて立派なゲートを通り過ぎたのだった。

今あたしは、城下町の入り口に立っている。正しくいえばたった今お城を抜けたばかりで、あんまりさっきの行の終わりから時間はたっていない。

「……………っんじゃーりゃ」

あたしは、そう呟いた。呟いたのにはちゃんとした理由があつて、理由というのは門を勇んで出たとたん、目の前に広がっていたのが大きな大きな木の塊だったというものだ。

「森？」

「はい、お姉さん。この森には樹の神様がいて、この森を城下町と城を近くするために伐採しても、次の日には完全復活しているそうなので、工事業者の方々はついに諦めたそうです。まあ、この世界は何が起こっても仕方がない世界ですから、そういったことも有り得るのかもしれませんがね」

「有り得ないでエエ！」

それを聞いた瞬間絶叫。そんな、こんなすごい森を伐採しても翌日完全復活する怪異を納得した瞳で語らないでください！！

「ま、お姉さんの世界では有り得なかったのかもしれませんがね。何はともあれ、この森は通称『迷いの森』と呼ばれるほど遭難者の出る森だし、この森を通らないと町には出られませんから、迷子にならずについてきてくださいね」

そう言われてから5分。

「あれ？おつかしいなあ……」

目の前を歩いていたはずのココ君が消えた。

ふらふらとそのあたりを探してみたけど、進めば進むほど此処が何処なんだか分からなくなってきた。

「まさか……」

最悪の考えが胸をよぎる。

「迷った……」

情けないです。神様、許してください。もう町に行くのに派手な格

好は嫌だとか潤風がピラニアとかに100回くらい捕食されればいいとかこの国で暮らしたくないとかいいません（最後のは明らかに現実逃避です。あんたもう諦めてるでしょ）。だからお許してください。

「コーコく——ん……」

心なしか呼び声も小さくなってくる。こんな森の中に独りぼっちで言うのはちょっと不安すぎる。

と、そのとき。

——ガサッ。

驚いて音のした方をビクッと振り向いた。

「なっ」

そこにいたのは……

「すう——」

羊の角と耳が生えていて、十二単を着た寝ている美少女だった。

「え、ちよつと！？何！？てか、なんでこんな薄暗い森の中で寝てるの！？しかも何故十二単！ツツコミどころが満載なんだけど……！？」

まあ、何はともあれ起こすことにしましたとさ

「ね、起きて、起きて」

12歳ほどの、顔立ちの整った横たわる女の子を揺する。

「む、うううう——ん……」
女の子は目を覚ました。

その瞬間、萌えた。

え？何がつて、あたしのLOVEメーターとかLOVEメーターとかLOVEメーターとかがよ！どうしよう。エンジン爆発を起こしそう。可愛すぎる。

眠たげな目やらそれをちよつと強調するちよつぱり幼げな顔とか目尻に滲む涙とかその他諸々がよ！！

「かんわい~~~~ん!!!!!!」

唐突に抱きついてしまいましたとさ

「きゃわっ！？あ、あの、あなたはいい……」

その子が呟いて、あたしはわれに戻る。途端になんか急に恥ずかしくなってきた。あたしともあるうものが見境なく年下の女の子に抱きついてしまうなんて！！！！一歩間違えばこれはGL行為！！！！（この小説にGLの素質は含まれておりません）

「ごっ、ごめんなさい！あまりにも可愛かったものでつい……」
「いえそんな。わたしこそ初対面の方の前で寝てしまって、恥ずかしいです」

「あつ、ごめんなさい！どなたかも知らないのに起こしてしまって！安眠妨害ですよね！」

「そうですね。わたし、かなう奏唄といいます」

「（ん？今この子、さらりと毒を吐いたように感じるのは気のせい？）あたし、紅誇といます。えっと、この辺でココ君を見ませんでした？」

「王子、ですか？あなた、王子とお知り合いでいらつしやる？」

「はい、え、えーと・・・紅の姫？」

「まあ！ナツツ様の13回目の生まれ変わりでいらつしやいましたか！そうとは知らずご無礼を！すみません！ではお詫びにわたしの家までご案内しましょう。このままここにいても迷うばかりですから、ひとまず家に」

というわけで、彼女の家に招待していただくことになりました。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

着いたところは優雅なお屋敷。外から見ると分らないけど、なんだか平安貴族とかが住んでそう。

門を開けて迎え入れながら奏唄ちゃんにはこやかにいう。

「あ！申し遅れましたが、わたしの家は平安貴族の末裔なんです」

古代日本を治めた御貴族は、いまベリーの国で健在でした

って、なんでやすやすと受け入れてんのあたし————

！？

ここ絶対突っ込むべき場所だよ！おかしいよ！なんでご恩と奉公の関係が成り立たなくなつて崩れたというあの平安貴族がまだいんの！！！！ツッコもうあたしイイイイイ！！！！（ご恩と奉公は平安貴族じゃありません。鎌倉です）

「ちょっと、なんで平安貴族がいんの？！ここ日本じゃないのに！！」

ダメだ・・・驚きすぎてツッコミの切れがない・・・

「えつとですね、わたしのご先祖様の、平安貴族だった誰かが、あるとき間違えてこのベリーの国に来てしまったんです。で、ベリー

の国って半永久的に帰れない土地でしょう？だからご先祖様は仕方なく暮らしているうちにだんだんとこの土地が気に入ってしまったんですね。帰りたくなくなって、時空の歪みがやっと現れても、帰ろうとしなかったんです。それで平安貴族は、今に至る、と・・・」

よく見回してみたら、いたるところで蹴鞠やら舟遊びやらをしている人もいるし。

・・・まあ、事実を受け入れるしか道は・・・ないのかもしれないね・・・。

第10話 驚き桃の木（後書き）

はい、新しいキャラは2人とも書くべきなのでしょうかね？ロイヤルはよく出ることになるかどうか自信がないので奏唄だけにしておきます。

奏唄 かなづ

12歳

血液型・O

苗字不詳。平安貴族の末裔。十二単をいつも着て歩いているせいか足や肩の筋肉は発達気味。眠ることが何よりも大切で、たまに酷いことを言う。悪気はないがかなり悪質。性格としては穏やか。

好きなものは曲水の宴で、嫌いな物は貴族のご飯（なんで？：紅誇）（太りますから！あんなのを食べていたら栄養失調で倒れるかもしれないし肝硬変になるかも！！ああ、怖い・・・）。

身長・123センチ（重いものを着て歩いてるせいか、全然身長が伸びないんです）（安心して。あたしは何もしなくても身長が伸びないから：紅誇）

体重・21キロ（なんでそんなに細いの？！：紅誇）（さあ・・・貴族のご飯ではなく武士のご飯を食べ、その上いつも10キロほどのお荷物をまとめて暮らしているからでしょうかね・・・）

はい、ありがとうございました！

ちなみに曲水しきすいの宴とは、小川に杯を浮かべて、通り過ぎるまでに決められた題の和歌や詩を作る平安時代の遊戯です！（12歳以上の方なら説明要らなくね？

では！次回に続きます

第11話 平安貴族のお屋敷（前書き）

もうなんか、めっちゃくちゃな感じですよ。
ヤバイですよ。

第11話 平安貴族のお屋敷

はい、今、貴族のお屋敷の前にいます。

「今、父上を呼んできますね？そのあたりで蹴鞠とか曲水の宴をお楽しみください」

と言われて。

「っていわれてもさあ……」

さっきの驚きが消え切れてないのに楽しめますか！って、ツツコむべきところはそこじゃないよ！あたし、この国の人に放置された回数これで3回目だよ！もう放置はやめてえ！！

とはいえ、仕方ないので、蹴鞠を見に行ってみた。

「………すごい」

みんな、超うまかった。なんであんな凹んだサッカーボールみたいので遊べるの。

てか、これ本当に遊戯なのかな？

と、そのときやっていた中の一人が、あたしに声をかけてきた。

「あれ？これはこれは、紅誇殿ではごさいますか」

古ッ！！！！口調古いよ！あなた美形なのにそのしゃべり方はないよ！！！！

と言うか、なぜあたしを知っている。どっかで会った？

「あの……えと……」

「おっと。申し訳ございませぬ。わたしは、ふじわらのみちわか藤原道王という者。藤原家の血を引いております」

「あ……ども……初めまして……有賀紅誇です」

自己紹介したら、いろんな人が驚いてきた。

「おお！ナッツ殿の生まれ変わったお姿」

「なんと。こちらが道王殿の言っていた可愛らしいお嬢さん。なるほど可愛いですな」

「あ……どうも……」

「緊張することはありませぬよ。気の置けない仲になることを願おう」

「は……」

いえ皆さん！あたしは緊張しているのではなくちよつと驚きすぎているだけですから！！！

てか、マジで口調古いつて！いやマジで！そしてあんたらは誰なんだ！あたしあんたらの事知らないぞ！？

「おや。紅誇殿、わたしを覚えておりませぬか。と言っても、まあ当たり前ですから、気になさることはありませんね」

「えーと、で何処でお会いしましたか」

「あのときの貴女といったらもうそれはそれは輝いていて、眩しすぎましたな」

「いえですから何処で……」

「素敵なごかつ「いいから何処で会ったか言えエエエエ！！！」」

あたしはもう待ちきれなくなって叫んだ。いい加減にしろ。何を考えているんだ。

しかしながら直衣姿の御貴族は、はっはっはと笑い出した。いや、なんかあたしは変なことを言ったりしていないはずなんだけど？！

「元気のよろしい姫君だ。国も明るくなりそうですな」
「ですな」

そついうことですかい。

「ちなみに、わたしはダンスパーティにありましたぞ」
「ん・・・?! あ・・・」

「バーテンの隣にいたんですな」

「あ——ッ! こつ、これはどうも・・・」

・・・思い出した。

あたしがへろへろになってカウンターに行ったとき、バーテンの隣にいたお兄さんだ。

よく考えてみたら確かにそのお兄さんは道王さんだった。

なんとという不覚・・・

「すみません・・・」

「いやいや、謝ることなんか」

「いえ、あたし、忘れていましたから・・・」

「大丈夫」

さも慣れちゃいました 風に道王さんは笑う。

いえ、ダメですよ? そんなのに慣れちゃ。

と、そのとき。

「紅誇さま————ッッ! ! !」

名前を呼ばれて、振り返ってみれば十二単を着た羊娘が駆けってくる。

「……大丈夫なのかな。あれ、10キロあるんだよ？筋肉痛になつても知らないよ？」

「紅誇さま！こんなところにいらつしやったんですか？ちようどいいです。ほら、父上、ちゃんと紅誇さまに御挨拶したんですか？」

[illegible]

「もちろん。わたしはそんな挨拶さえも忘れるような貴族ではないぞ」

いやあんた、バツチり忘れてたよ？初めに発した言語は挨拶じゃないかと記憶してるよ？

でも、今考えるべきはそこじゃない。え、なに？ 父上？ 誰が？ 誰の？

道王さんが……？

奏唄の
・
・
・
・
・
・
？

[illegible]

絶叫。
放心。

「わ！どうされましたか、紅誇さまっ？！」

「え、だだだだって、いいいま、ちち父上って……みみ道王さんも返事……」

「え？あ、えええ？！嘘、父上紅誇さまに父子だっていつて……」

「ん？無論言っていないぞ？第一お前と紅誇さまが友人だなんて知らなかったしのう」

「なんと。これだから父上は困るのですよ……」

まだ啞然としているあたしのほうを奏唄は振り返った。

「こほん。申し遅れました、父の道王でございます」

「えええじゃあやっぱり……」

「はい。親子でございます」

何故……何故なのだ神様……何故この二人が親子なの？

それ自体はそんな驚くべきことでもないはずなんだけどなあ……
あたしは、とんでもないことを聞いた気がした……。

バタンツ!!!!!!!!!!

「え」

あたしが皆様ともすっかり打ち解け、一緒に曲水の宴をやっていた
ときのこと。

突然、大きな門が激しく開いた。

「なっ」

「おぬし、何者?!」

いやだから、古いですって。おぬしとか言つなよ。仮にも美形なん
だから。

心の中でツッコみつつもあたしは、門を開けた人物を見てびっくり

した。

「お姉さん、いますか！！！！」

「ココ君！」

入ってきた人物は、なんとココ君だったのだ。幻覚じゃないよね？
ないよね？

皆様も、ココ君を見て刀を（物騒なもの持ってんな。ここは銃刀法違反とかないの？）しまった。

「王子殿ではないか」

「その様子から見るに姫君のお出迎え」

「お姉さん！」

でもすでに、ココ君はあたしを見つけて駆けてきた。

「お姉さんッ・・・無事でよかった」

あたしに抱きついたココ君はいつになく不安定で可愛くて・・・
うんか、ちょっと可愛すぎて抱きしめなくなる。うん、抱きしめよう。

ギュッとすると、ココ君は上を向いてあたしと目を合わせる。その目はなんだかプリンよりも震えていた。えちよっと、泣かせた？！
泣かせたのあたし！？

「お姉さん・・・」

頬と頬を触れ合うと、もうココ君に不安定さは感じられなかった。
瞳もしっかりいつもの王子の品格を取り戻している。

「皆さん。今日はお姉さんがお世話になりました。奏唄もありがとうございます。
うございました。森の中でお姉さんを見つけてくれてどうもありがとうございます」

ココ君がお礼を言うと、みんないえいえと首を振った。

「今日はわたしたちも楽しませていただいたし」

「のう？紅誇殿とも知り合えてよかったし」

「いつでも遊びに来てくださいね、紅誇さま？迷ったらわたしがお助けいたします」

「うん、ありがとう」

優しい言葉をもらえた。うん、君たち良い人ばかりだね！言葉は古いけど。

「さあ、お姉さん、行きましょう。城下町、行くでしょう？」

「うん」

さつとあたしはココ君に姫抱きされた。にしても、力持ちだよなあ。姫抱きにしても、門を開いたときにしても。

ココ君は軽くお辞儀すると、ひらりと飛び上がる。

「えちよちよちよつとオオオオオオオオオオ！？飛ぶ意味あんのか
アアアアア！！！！！！」

「はい」だって、このまんまじゃ門が開けないでしょう」

「嘘つけ！！さっき凄いい音響かせて門壊れるくらいのスピードであ
けたじゃん！あれさっき確認したときはちゃんとあいてたぞ！！！」

「・・・森に捨てますよ」

「無理イイイイイイイッツ！！！！！！」

「冗談です」

「ギヤアアア！！！！」

急降下・急上昇・急旋回いたします。心臓の弱い方・妊娠中の方・身長が140センチ以上でない方はお乗りになれません。

「えー！なにそれこのココ コースター急旋回とかすんの？！つか、ジェットコースターだったんだ！」

「しませんよ」

「なんだよアナウンスの嘘つき！！でもあたし140センチ身長ないよ！」

「良いんです♪僕が許しますから」

「許すな地上に降りろおおお！！！！えちよつと、マジで怖いから・・・！！！！ッッギヤアアアアア！！！！！！」

Good Luck!!!!

「助けるバカ——！！！！」

第11話 平安貴族のお屋敷（後書き）

じゃ、出てくるかはよく分かりませんが、一応道王さんのご紹介を・

ふじわらのみちわか

藤原道王

32歳

血液型・B

細かいことは気にしない、のんびりした平安時代の藤原道長の子孫。奏唄の父でどちらかというと奏唄に教育されてるっていう感じ。

刀の腕は超一流で強いけどまったりしているため、大変な事態に陥ったりしていない場合は和解を選ぶ方。

言葉遣いが古い。

好きなものは歌を詠むことで、嫌いなことは戦いと武士。

身長・181センチ

体重・68キロ

以上！！

紅誇はココ コースターで生きて帰れたんでしょうか？まあ、無事を祈りましょう！！！（爆

第12話 城下町（前書き）

なんかいつもよりもコメディ要素が少なくてもシリアスではない
という微妙な12話です。

第12話 城下町

「・・・ぜえ・・・」

やっと、ついた。死ぬかと思った。

「な・・・んだよあれ・・・ちょっとココ君?!あたしを殺す気?」

「何言ってるんですかお姉さん。僕は仮にもお姉さんと婚約している身なんですよ?そうでなくてもお姉さんが大好きなのに殺したりするはずないじゃないですか」

「だって、死ぬかと思った!!」

たった今、あたしは街についたところだった。

姫抱きの超凄いコースターでもう瀕死直前だったんだけどね・・・

「で?これから、どうするの?」

「今から町役場に行きます。お姉さんの名前を登録しないといけませんから」

みんな常識外れなのにこういうところだけはしっかりしてるんだ。

「行きますよ、お姉さん。おいてっちゃいますよ、いいんですか」
「え」

みるといつの間にかココ君は10メートルくらい先に行ってしまったので、こつちを見ている。

もちろんまた迷子になるのが嫌なあたしは、走って追いついた。

「なんか、町なのに人通り少くない？」

「ここは裏通りですから」

「この広さで?!」

真顔で凄いことをいうんじゃない。こここの道幅、日本の国道くらいあるんだよ!? 表通りはどんなに広いんだ!

「ほら、町役場につきました」

しばらく歩くとココ君が立ち止まって言う。

「え？」

目の前に広がっているのは小さなドア。横幅が20センチくらいで縦は50センチくらいの。

「なんでこんな小さいの？」

「裏口ですから。表はもつと広いですよ」

「そう?」

ちょっと疑問に思いながらも背をかがめてそのドアを通る。ココ君も通ると、ドアを閉めた。

「・・・っわ」

広い。ここはなんなんだ。

人が賑わうそのホールは、見るにお城の玄関ホールほどもある（というかお城の玄関ホールが広すぎるんだよ）受付、だろう。

でも、こんなに大きくする必要はないと思う。だって、受付だよ? どうしてこんなに広くしてるの?

「さ、こつちです。住民登録は5階ですから」

え? ちょ、町役場に5階なんてあんの?! あたしのいたところは市役所だったけど2階までしかなかったよ!!

啞然とし続けるあたしの手を引いてココ君は、エレベーターらしき

ものに乗る込む。でも、マジでおかしいと思う。エレベーターが見ただけで優に30人ほどやすやすと乗れそうなほど広いから。ガラス張りで外の見えるそれは3階までいったとき初めて町を眺めることができた。

「わぁ」

綺麗だった。ピンク、水色、クリーム色などのパステル調の色で彩られた町は迷いの森に囲まれて、一枚の絵にでもなりそうなかんじ。

「綺麗ですか？」

「うん！」

「そうですか。気に入っていただけてとっても嬉しいです」
あたしとココ君と中年のおっさんと20代前半くらいのお姉さんが乗っているエレベーターは5階に到着した。

「着きましたよお姉さん」

ココ君に手を引かれて降りると、そこは受付とは違って灰色で壁と床を塗られた雰囲気がある階だった。というかそれよりも、さっきのおっさんとお姉さんが降りてないってことは、まだまだ階があるってことだね？

「ねえココ君。ここは、何階まであるの？」

「えーと、地下8階から27階まであります」

「ギヤアアアア！有賀家に帰らせてください！！！」

「ダメです。というか帰れませんから・・・」

だって、町役場だよここ？おかしいよ！！絶対におかしいよ！！
！なんでそんなに階があるの！？

「お姉さん。もう登録所まで来てますから。がんばってくださいね」
「えー！」

気付けば、魂が抜けている間に白っぽいドアの前にいた。

「入りますよ？」

返事も待たずにドアを開けるココ君。

中は、綺麗に片付いた人気のない部屋だった。いまさら言うこともないと思うけどかなり広い。

ピンク色のスーツを着たうさ耳のお姉さんが受付らしきところに座っている。

「住民登録に来ました」

「え？ああ、王子様じゃない。デート？」

「ですから住民登録ですよ。ネリア、登録票ください」

親しげ。ココ君はよくこういうところ来るのかな。

考えていると、ココ君が一枚の薄い紙を渡してきた。

「え？」

「登録票です。書いて」

「う、うん」

見てみると、日本語で書かれている。ここって日本語通じるんだ。

書く欄は、名前、出身地、在住する場所、年齢、役職。住民登録としては簡単。

有賀紅誇、日本、城、14歳、姫。書き込んだのを確認してココ君に渡すとココ君は紙を見つめて、小さくうなずくと受付のうさ耳さんに渡す。

「へえ」。じゃあ貴女、紅の姫君なんだ？」

「え、はい」

急に話を振られて戸惑ってしまった。でもお姉さんはクスリと笑うと今度はココ君に話しかける。

「じゃあやつぱりデートじゃない。がんばってね、王子様」

「冗談言わないでくださいよう。まあそうですけど」

「そうなの!？」

「洋服も見に行きますから。ついでに小物も見に行きますから」

いいのか・・・？だってあんなに洋服があるのに・・・

そういうと彼はにこりと笑う。

「だってあれじゃ町に出られないんでしょう？だから買いに行きます」

「コラ、王子、姫様。ここでそういう可愛いオーラを出さないの！
人様の迷惑になるでしょ」

お姉さんは不機嫌な顔になりかけてる。

ココ君は、仕方ないなあという顔で立ち上がった。

「じゃあ、他のところで可愛いオーラを出してきますねっ」

「そうしな」

ココ君はあたしの手を引いてそこから出た。

「ちょっとココ君、本当にいいの？」

今あたしたちは町の表通りに面した洋服屋にいる。店名は『レアチ
ーズ』。

ていうか、ショーウィンドウがなかったら絶対ケーキ屋だと思って
た。なんでこんな名前なんだ。

でもなんかここの店、すごい高級そうな洋服が揃っててなんてい
うか、ケーキ屋と勘違いしたら申し訳ない。

「良いんですよ。まあカジュアルで可愛い服も揃ってますし、靴と

か小物もたくさんありますから」

いいのかね本当に・・・あたし金持っていないぞ？全部おごりって、そんな申し訳ないことできない。するしかないんだけだね。

あたしがズボン売り場で迷っていると（ズボンだけど、全部可愛い。どうしてこんな可愛いんだろう）向こうからココ君がやってきた。手にはハンガーを5個ほど持っている。

「どうしたの？」

聞いてみるとココ君は微笑む。うわ、可愛い。

「可愛い服があったので着てほしくて」

というわけで、更衣室で着替えることになった。

まず一番初めはワンピース。ピンク色のアンブレラプリーツで、上には白いベスト。お揃いの銀の刺繍が入っている。着て鏡の中の自分を見つめると、いつもはないおしとやかな雰囲気漂っている。カーテンを開けるとココ君はにこりと笑って、「素敵です！」って褒めまくる。

次から次へと着ていく服は全部長かれ短かれワンピースでパステルカラーで洒落た服ばかり。自分を見るたび変わった自分でなんだか楽しくなってくるし、ココ君はココ君であたしをずっと褒めまくっている。しかもその褒め言葉、毎回毎回違うんだよ？凄くない？

何枚か着たあとに、店員さんらしき人が近づいてきた。

「王子。彼女の服選んでるの？」

知り合いなのかな。

「まあそんな感じです。どうですか、ジェイ。彼女にどんな服が似合うと思います？」

「そうだな・・・あ、申し遅れました、僕ジェイ。この店の一応店員でデザイナー。といっても洋服しかやってないだけだね」

「は、はい・・・有賀紅誇です」

「え？じゃああのナツツ様の生まれ変わりのお姫様？えっと、紅誇って呼んでいいかな。僕もジェイって読んでいいから」

「う、うん」

どこからそんなに情報が流れ出しているんだろう。会う人会う人みんなあたしの事知ってる。

ジェイはズボン売り場の方に歩いて行って、ひとつズボンを取り出してきた。

「お姫様だからね・・・あまりパンツには出会えないと思うんだ。だからわざとズボンにしてみたけど、どうかな」

凄い、さすがデザイナー。カーテンを閉めてはいてみると・・・と。ひとつ問題が発覚した。

「・・・ねえ、ジェイ？このズボンはくのはいいんだけど、全部ワンピースしかなくてトップスがないんだけど」

「あ！忘れてた！王子がワンピース好きなのとか全然覚えてなかった。ごめん、ちょっと待ってて。選んでくる」

額を押さえて彼は言うともたどこかに行ってしまった。

しばらくして帰ってきた彼の手にはパステルピンクとパステルオレンジのなんかが握られていた。

「これなら合うと思う」

渡されて、着てみた。すると・・・！

「すっごい・・・！」

いつもの自分のイメージを崩さずに、それでも何かが違う自分ができている。

ひざ上丈のパステルコバルトの吊りズボンの下に、パステルカラーの綺麗なシャツ。胸が広めに開いているところをセルリアンブルー

の見かけインナーで隠すところが可愛い。

カーテンを開くとココ君が口を押さえた。

「ドレスも似合うけどお姉さん、そういうのもお姉さんらしさが出ていて可愛いですね！」

「そんな。ジェイの選び方がよかったんだよ」

「そんなことないよ？紅誇はなんでも似合うね。あーあと、今君が着替えてる間にもう二つ持ってきたけど、着る？」

そのあともいろいろと試着して、それから靴も見た。

「町とか森に近いから、汚れが落ちやすく履きやすいのがいいんじゃないかな」

というジェイの意見により、カフスの付いたピンクの履きやすい低めのヒールを選んだ。

それから小物は、唯一ひとつもないバックを選ぶことにした。使いやすそうなオシャレで大きめのポシェットになった。

それからおまけで、ココ君が「絶対似合います！」って一目惚れしたりボンの白いカチューシャも。

っていうかあたし、基本の髪の毛の色がイタイからね・・・

で結局試着したものの半数（って言うことはかなり多いんだけど）と、靴とバックとカチューシャを全部ココ君に買ってもらっちゃった。いやいや、あたしはカジュアルなものがほしかったんであって、こんなに買ってもらいたかった訳ではないんだ！！

いまあたしは、ココ君と帰路を歩いている。

ちなみに森の中だから手を繋いで。実はちょっと今至福のときです・

・・・

「よかったですね、洋服が選べて」

「うん」ってか、大丈夫なの？あんなに」

「全然平気ですよ！お姉さんのためなら何でもできます」

いや、そういうの聞いてないから。

ていうか全然大丈夫ですよって、どんなに金持ちなんだよ。

「え？でも、お城のお金はお姉さんのお金でもあるんですよ？お姉さんだって王家の人ですからね」

おい、たった今、ココ君あなた凄いいこと言っただけだよ？

「……嘘」

「嘘じゃありませんって」

じゃあ、え、ちよつと待て、あたしって実は超金持ちじゃん！！！！

「お城の金庫に行けばまあお姉さんの願望を果たせるくらいの金額は優にあると思いますよ」

「マジで？！しかも勝手に持ち出すの！？」

「当たり前じゃないですか。お姉さんの部屋のドレッサーの一番下の引き出しに鍵が入ってますよ？」

「うそ……帰ったら見なきゃ」

あたしはこのとき、このとんでもない秘密を知ってしまったのでしたとさ……。

第12話 城下町（後書き）

久々（？）に新しい人が出てきました！

ジェイ・レアチーズ

14歳

血液型・A

レアチーズの店員兼デザイナー。店の名付け親はジェイだけど、な
んでケーキ屋でもないのにこんな名前をつけたかは後々本編で。
基本的に優しくて穏やか。客のイメージとかオーラを見極める素質
を持っている。

好きな色はパウダースブルー。好きな物はラズベリーで嫌いな物はハ
チミツだけど、意外と甘いものも嫌いじゃない。

身長・168センチ（・・・なんで同年代なのにそんなに身長が高い
の？：紅誇）（牛乳が好きだったからね。よく飲んでたせいかも）
（あたしなんか大きくなりたくて一日に牛乳パック2本飲んだの
に・・・：紅誇）

体重

42キロ

こんな感じです（何この微妙な紹介・・・）。

次回はすぐに更新できると思います！（誰も望んじやいねえよ

第13話 ティーパーティー（前書き）

超意味分らないです。自分でも（汗

第13話 ティーパーティー

「ここ、どこだ………?」

城を出て、20分後。お城の庭を抜けて、迷いの森に入り、しばらくしたあとだった。

マジで、迷った。

どうもあたしは、ココ君がいないと道に迷うという能力に長けているらしい(能力じゃない)。

周りを見回してみても、全部同じ景色に見える。

「道、作れて………」

ぼやいてみても、助けがこないことは分かっている。いやでも、ぼやかずにはられない。

「誰だよ?!この国の権力者!あ、家の城の人か……」
自問自答って悲しい。

とりあえずそこにいても仕方ないので、歩き回ることにした。もしかすると森から出れるかもしれないし、運がよければお城のほうに出れるかもしれないから。立ち直りの速さはD級だった。

しばらく歩いてみると、なにやら明るい土地が見えてきた。

「……奏唄のお屋敷かな……?」

そっちの方に駆けていってみると、そこには……

「ティーセット」

みたものをそのまま口に出してみる。

いやいや、ちよつとまで。何故こんな森の中にティーセットがあるんだ？

確かにティーパーティーをするにはもってこいの土地だというのは理解できる。

ここだけ草があまりなくてちよつと開けているし、天窓みたいに樹も空に穴を開けている。だからってこんな場所でパーティーするやつが何処にいる。

「いいのかな、ここ」

来たところに呆然と突っ立っていた。

がやがや。

話し声が聞こえてきた。

「え、誰かくんの？この土地に詳しい人が来るといいな」

そう思っていると、ふいにバツと目の前の草が開けて、そこにいたのは――

「あれ？なんか、誰がいるよー？」

―― 3人の、女の子だった。

「えっと、この人誰だか、知ってる人いるー？」

「知らないです」

「見たこともないですうー」

えちよっと、知らない人の前で円陣を組んで話し出すなよ！ちよっとイラツとくるぞ！？

しかもなんか全員耳とかそういうのが生えてて危険レーダーがちよっとピピツときてるんだけど！

「えーとお、あなた、お名前はなんていうの？」

初めに発声した女の子が聞く。

「え、えっと、有賀紅誇っていいいます・・あの、失礼ですがあな「えー！有賀紅誇って、あのあの、ナッツ様の13回目の生まれ変わって人ですよ！町で噂になってます！」

いきなり発言を遮られたあたしはちよっとムツときたけど、それよりもむしろその人たちの名前の方が興味ある。
ていうかさ、だれ？

「えーマジで！うっそ、はじめてみた！！キヤー、ナッツ様にチョーそっくりだねー」

あたしは展示物か！ツツコミたくなる・・・

「これはご無礼をしてしまったですうー」。あたし、ピーチっていますうー。よろしくですうー」

髪を超長い女の子が手を取ってくる。まったりしてるな・・

「わたし、チェリーって言います！不束者ですが、どうぞよろしく
お願いします！」

メイド服の女の子が頭を下げてきた。しっかり者なのかな？

さて・・・残るはテメーだけだコノヤロー。

頭に大きなリボンをつけた女の子が、にこりと笑う。か、かわいい・
・！

「あたしはアップル。花の14歳、性別女です！」

暖かなひと時。

いや、それは違う。賑やかなひと時？

ううんむしろ・・・騒がしいひと時！？

それぞれアクの強弱はあるものの、まあ個性的な人たちが揃ったティーパーティーで、あたしは今、いろんなお茶を振舞ってもらっている。

「のむー？ピーチティーだけど普通のよりも甘くて桃の味が凝縮されてるんだー！ほのかにミントの香りが加わって、飲む人によつて感じ方は違うよー」

上目遣いでティーポットを差し出してくるアップルに、ティーカップを掲げる。

いや、正直に言おう・・・いまさらだけど、かなり萌えるよ？いやほんとに。

アップルは、ココナツイエローの髪にコーヒープラウンの瞳が映え

て、ヒラヒラのミニスカとフリルが細い四肢によく似合う。頭のクリーム色のリボンの後ろにはロップイヤーのうさ耳が垂れていて、マジで可愛い。

ピーチはどのだか知らないけど薄紫色のセーラー服を着ていて、ぱつんと前髪が半開きの瞳によく合っていて。髪の色は萌葱色でひざまである長い三編みがかわいい。熊の耳と尻尾がちりとあるのがすっごくかわいい！

チェリーはなぜかメイド服で、猫耳と猫の尾が生えていて、絶対ここにオタがいたら「ハアハア」って言う効果音が出そうなくらいの可愛さ。ゴスロリ系なメイド服に藍色のおだんごヘアが似合いすぎる。

3人ともちよつとみればどこかのアイドルユニットになれそうないどかわいい。こんなに可愛い3人組なんて探してもそうそういないと思う。

「かわいいね」

「なんて唐突なの、プレイボーイ」

いやでも、マジで可愛いんだって。

そういうと、みんな「カアッ」って言う効果音が似合いそうなほどに頬を染めた。

「照れます」

「恥ずかしいですー」

「紅誇だって、かわいいじゃん」

なんて嬉しいことをいうの、この子は。

ていうか、絶対同じ年だって思わなかった。だってあたし、ただでさえ背が低いから、他の同じ年の人がみんなおっきいんだよね。あたしより小さい14歳の人、初めて見たし。年下好きだし、いいん

だけどさ。あ！ロリコンじゃないよ！？シヨタコンでもないし、いやだから、ただ年下が可愛いだけなんだよ——！！

「紅誇、なんでこんなところにいるんですか？わたしたちと会ったこともないのに」

考え事をしていると、ふとチェリーが話しかけてきた。ちよつと困った顔で答えた。

「ちよつと、なんか迷つてね・・・」

「えー！！大変ですうー！じゃあ、王子とか心配して・・・」

「ううん。一応遊んでくるっていつてあるから大丈夫」

「そうなの？でももうそろそろ7時くらいになるよ？」

「嘘！！！」

ガタンツと席を立つと、みんなびっくりしてこっちをみた。

「だって、まださつきから全然日も動いてないじゃん！！」

「え？あー、これは、天井の模様だよ。一応プラネタリウムみたいな仕組みになって、あれほんとの空じゃないから」

「紛らわしいことをすなッ！！！」

はつきりいつてヤバイ。お城の夕食は7：30からだ。きたときみたい迷って行き当たりばったりで歩いてたんじゃ、絶対30分までに帰れない。

「どうしょ・・・まあいいや、えーと、みんな、今日は楽しかったよ。また来ていいかな？」

「うん！」

「もちろんですよ。いつでもきてください」

「無事にかえるですよー」

「うん」

あたしはお礼をいって、そのパーティー会場から出た。出てみると空はもう結構日も沈みかけて、オレンジと紫とピンクがマーブル模様を作っている。

「やばいなー」

振り返ると確かに、目には見えないけど壁があって、それがドーム型をしているのが分かった。

「なんでこんなの作れるんだ。ラピ・タかよ」

気の抜けた声でツツコンでみるけど今はそれどころじゃない。迷わないように正確に帰らなきゃ。とはいえ、来た道が迷ってるんだから、まず、ここがどこかが分からないんだ。

「きゃー」

途方にくれた。
と、そのとき。

「紅誇様——」

声がした。これは、どこかで聞いた——

「・・・リブル？」

天から舞い降りてきたのは、黒いマントを羽織って愛猫のプシーを肩に乗せた少女だった。

「なんで——」

「今日は夕ご飯が早めになるから、紅誇様を探してきなさいとココ様に言われました。ほら、早く暮に」

「嘘・・・」

あまりにもタイミングのよさに、みんなに感謝した。

「ほらー」

箸の柄を差し出してくるので、それに横のりした。

「いきますよー」

ふわり。身体が浮いた。

「おおー」

気持ちいい。風になったみたいで心地よくて、お城につくまでの間にだんだん眠くなっていた。

「おねえさーん！」

聞こえるのはあの少年の声。

「ココ君！ごめんね、帰るの遅くなって」

「いいえ、いいんです。お姉さんが無事だっただけで僕は満足ですから」

いやだから、なんでそんなにかっこいいセリフを言うのさ。キザボ
ーイめ。

「さあ、もうご飯ですから、食堂に行きましょう」

「うん」

ご飯が終わったあと。

「お姉さん、また迷いの森で迷子になりましたか？」

「ぶっ!!」

「フフ、可愛いですね。で、どこまで行っていたのですか？」

「え、えーと、チェリーとピーチとアップルって言う3人組のころまでだよ？」

「ああ、あそこですか。ティーパーティーに参加してきたんですか」「うん。可愛かったよ」

「あの3人、ああ見えて実はすごい科学力を持ってるんです。あと、町の中のトップアイドルですね。がんばってくださいね」

「何そのちよつと不吉なマーク。訳が分からないんですけど。しかも町のトップアイドルだったの？ほんと？それ」

「そのうち分かりますよ。さ、お風呂入りましょう」

「え、ちよつと待て、一緒にはいんの!? え、嘘、無理無理無理無理、だから無理なんだってばああああ!!」

「平気です」

「なんでそこだけむやみに怪力なんだよ! だから落ち着け! 隠れ変態かココ君は——!!——!!」

そのままあたしはココ君に更衣室まで引きずられて行って、そこでなんとか逃げ出して、結局城の中で迷子になりました

第13話 ティーパーティー（後書き）

3人も出ました。何でこんなに出るんだよ（自分で書いただろ

アップル

14歳

血液型・A

紅茶を入れる係。紅茶に詳しい。

ロップイヤー娘。

好きなものは濃い目のミルクティーで嫌いな物はラベンダーティー。
身長・120センチ（ちっちゃくて可愛いよね：紅誇）（ちっちゃいのは自慢♪）（そうなの！？：紅誇）

体重・21キロ

ピーチ

血液型・年齢・身長・体重はすべてアップルと同じ。

セーラー服で髪が超長い。熊っ子。いつもちよっと目が半開き。スコーンを作るのが劇的にうまい。

好きなものは甘いピーチティーで嫌いな物はダージリン。

チェリー

ピーチやアップルと同じ

メイド服でいつも敬語。猫耳などが似合う。

ティーパーティーでは用意・片付け係。

みたいなかんじです。なんか似たもの同士。
ちなみにピーチは意外とマジメでちゃんと学校に行っているけど、
チェリーは侯爵の家のメイドだし、アップルはバニーカフェのバイトで忙しいので学校には行っていません。
ああもう、自分でも意味が・・・（爆発

第14話 愛と少年

君は僕の事を

僕ほどに想っていないかもしれない

でも僕は

僕の願望に忠実に――

「う、うん・・・・・・・・」

ただいまの時間PM2:30.

今日も昼寝は絶対調だった。

「うわ、ヤバイ！」

今日こそは絶対に女王様と会ってみようと思っていたのに！！
何こんなところでのんきに昼寝なんかしてるんだあたしは！

ぐぐぐつ。
寝返りをうって目を覚まそうと右に転がる。

9

「すー?」

なんか今、聞こえちゃいけないものが聞こえたような。

覚悟を決めて目をあける。







「おはようございます、お姉さん。気分はいかがですか？」

「……ツギアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

「ちよつとお姉さん?!大丈夫ですか?!」

「ななななな・・・！！！」

そこにいたのはいとしきあの猫耳少年。ていうかマジでなんでもの！？

「なっ、なんで……」

「お姉さんの部屋に遊びにきたらお姉さんが気持ちよさそうに寝ていたもので・・・思わず僕も添い寝しちゃいました」

はにかみながら言う彼はかわ．．．じゃない！！そうじゃなくて！
「いやいや、おかしいだろう、何故当然のように乙女の部屋に侵入してきて当然のように添い寝してんの！絶対おかしいよ！家宅侵入罪だよ！」

「お姉さん、僕も一応この城の住人ですから。家宅侵入じゃありませんから。それにいいじゃないですか。どうせ結婚する身ですし」

」

「ココ君！なにいつてるんですか！それはそうにせよそれまでは紳士でいてくださいよ！」

「無理です」

にこやかに言ったココ君はあたしに抱きついてくる。可愛いなあ・

・
輝く金髪が柔らかくて気持ちいい。無意識のうちに頭を撫でていた。

「お姉さん。今日もどこかへ行きますか？」

「え、えーと、今日は一応女王様に会ってみたいなあ、と」

「そうですか？でも今日は生憎と女王様は公爵邸に遊びに行かれてしまってますが・・・」

「え！」

驚いてぱつと手を離してしまった。ってか、女王様って外に出たんだ。あたしとしては家の中で豪勢な暮らしみたいなんだと思ってたのに。

「ということで、お姉さん」

「え？」

キラキラした笑顔で彼はあたしを見つめる。

「今日はゆっく〜り一緒にいましょうね」

あまりにも可愛すぎる。その笑顔はやられる。けど、え？一緒にいましょうねって・・・

「うん、まあいいよ。暇だし」

「やった」

それだけ言つとココ君はあたしに体重をかけてきた。

「え？ちよ、うわうわちよつと……！！！」

いやいや、別に重かつたりするわけじゃない。要は、その体制。なんであたしはココ君に押し倒されちゃってます体制なの？！え、ちよ、待て待て！！

今ちよつとヤバイ。手まで押さえつけられて、ちよつとマジで……

耳元で、囁かれる。

「お姉さん、僕を愛してください」

いや待て、何言ってるんだ。

耳を彼の薄い吐息が刺激して、背中が少しゾクツとする。

「お姉さん、僕に愛をください」

いやだから、何を言っているんだよ。

甘い言葉を囁かれる。

「お姉さん、僕は貴女を愛すけど、貴女は僕を愛してくれますか……？」

「待て。君は、何を言ってるんだ？」

「愛して、ほしいんです。お姉さんの、愛がほしいんです。聞いてくれますか？僕の話」

彼はいつになくシリアスな雰囲気醸し出している。

こんなになった彼に疑問は残るけど、聞いてあげないと。今にも涙のこぼれそうな彼の震える瞳を見て、そう思った。

「う・・・・・・・・ん」

「じゃ、聞いてくれますね。では、4年前。ココナツ・パーム少年の悲劇のお話、始まり、始まり・・・」

4年前の話です。ココ少年という、どこかのお城の王子様がいました。ココ少年は女王様と王様から大きな愛情を受けて育ちました。あるとき、ココ少年が寝ていると、物音がしたので、少年は目を覚ましてしまいました。

少年がじつとまた寝ようとしていると、不意に、ガタンツという大きな音がして、少年はびっくりおきてしまいました。そこで少年が聞き耳を立てていると、なにやら話し声が聞こえてきます。

その声は小さくてココ少年にはよく聞こえませんでしたので、少年はまた眠ってしまいました。

しかし次の日の朝、少年は目を覚ました途端、悲鳴を上げました。なぜなら少年の横にいたはずの両親は消え去り、血痕が残っていて、一本ずつ緋色の薔薇だけが残っていたからです。

その後少年は若すぎるから代理ということで、美しく気品があり頭のよい公爵と公爵夫人が少年が15になるまでの王としてつれてこられました。

しかしその公爵たちからは少年は今まで受けていたような優しい愛をもらうことはできなくなってしまうたのです――

・・・それからココ少年は自分には13代目のナツツ様という婚約者がいると知って、その姫御子が自分にあの頃のような愛をくれる

人だと願いながら育ってきたのです……お終い」

それをきいたあと、あたしはしばらく動くことができなかった。
思いがけないココ君の過去に呆然とした。

「そ……んな……」

「いえ、本当のお話です。そんな訳で、ココ少年はいま、優しくて
綺麗で可愛い婚約者様に出会えて、有頂天になっています」

でも、今気になるところは、そこじゃない。

「ご両親は……王様と女王様は……殺されたの……？」

「わかりません。ちなみに緋色の薔薇の花言葉は『陰謀』です」

「じゃあ刺客か何かか……？」

「多分。王位を狙うものか誰かが殺しに来たのかもしれませんが、
あるいは私怨で」

ココ君は……愛情に飢えていたのか……

実はあたしも、早くに両親をなくして家族が意地悪な伯父さんだけ
だったりするから、なんとなくわかる。

でも、でもそんな、傷が深すぎる。まだまだ幼くって、たっぷりの
愛情ももらい損ねて……

愛さなくては、この少年を。

あたしを長い間ずっと待っていた、愛情に飢えた少年だから。

うつん、それ以前に――

あたしが、彼を愛したいから・・・！

あたしは、ココ君をギュッと抱きしめた。

ココ君の潤んだ瞳から一筋の涙がこぼれおちたのを、見なかったことにして。

そのあとあたしが立ち直ったココ君に喰われそうになったのは、言うまでもないだろう・・・

「ッギヤアアアア！！！！冷静に言っていないであたしイイイ！！」

第14話 愛と少年（後書き）

うわ、後半から超シリアスになってしまいました・・・（アホか意外と悲しい過去をかくぐって生きてきたんですね、ココも紅誇も（お前が作ったんだろ

たぶん次回はハチャメチャストーリーになるか、女王様が出てくるかです（曖昧？！

乞うご期待！！（しないでください！

第15話 裏双子

「う~~~~ッー! つ、つかれたあああつ」

今、あたしはお茶会への道を歩いております。

いや、実を言うとこんな冷静に解説してんのおかしいくらい疲れてんだけどね? でも仕方ないじゃないですか! あたししかないんですから・・・!

「す、水筒持つてくればよかった・・・」

今頃後悔しても遅いんだけどね。頑張れあたし!! あともうちよいでアーモンドのアイスティーが飲み放題なんだ!!!

「あ・・・みえた、かも・・・」

潮風に向かって歩いてくると、コバルトブルーの綺麗な海が見える。その目の前に見える画像の端に、小さなログハウスと一組のテーブルセット。ちょちょこ見えている黒い影は人だろう。

そのまま歩いていると、だんだんと人の区別がつくようになる。並んで座っているのはモカとカプチーノだろう。で、ひざにお座りのセットはシロップとコナだろうな。で、一人で何かをこねているのは多分お菓子作りのアーモンド。

ほのぼのしすぎてて、そこにいる謎の人影をあたしは見逃していた。

「つ、着いた・・・ついたよあたし・・・」

「うん? どうした? ずいぶん疲れてるみたいだな」

へたつて着いたあたしをアーモンドがコック帽姿でお出迎え。いつもこんな格好で料理してんのか。

「疲れてますから・・・」

「いったいどうしたんだよ？でも、たった今レーズンクッキーが焼きあがったぞ。とりあえず卵黄パンも焼いてるけど・・・ホットココアでも飲むか？」

「う・・・ありがと・・・冷たいのがいいな・・・」

「こんにちは、紅誇お姉ちゃん！」

満面の笑みで迎えてくれたのはシロップ。うん、その笑顔は癒されるよ。認めちゃうけど、多少シヨタロリコンっ気のあるあたしにはかなり萌えるよ。

「こんにちは。コナ君もこんにちは」

「んむ・・・」

「あ、ごめん」

お昼寝の最中だったみたい。すごい、シロップのひざの上で寝るんだ。可愛い。

「あ・・・？紅誇、きたの？」

「え？」

声の元は、モカ。いいね、これ。髪の色がちがくて区別しやすい。言うつか、口に生クリームがついてるよ。いいのかな？あ、今舐め取った。ちよつといたずらっ子ぽくって可愛い。

「うん。もしかや今気付いた？」

「うん」

「あ、紅誇。ケーキ頑張つて食べ過ぎて気付かなかった」

「太るよ、カプチーノ・・・」

そっくり同じの、声の主。カプチーノも口とかほっぺに生クリームがつきまくりだって。取ろうよ。せめて口の周りのは舐めようよ（

あたしがそれを見ただけなんだけど)。

「大丈夫だよ。僕ら、太らない体質だし」

「いや、そういう問題じゃなくね……」

「んあ？カプチーノ、ほんとにどうやって食べたの？ほっぺとかつきまくり」

「嘘！」

「今取ってあげる」

そういうと、モカはカプチーノのほっぺに付いている生クリームを舐め取った。

「……いやあの、何か間違ってる気がしますけど……?!」
「なんで、えちよつと待って、普通兄弟のほっぺに付いてるの舐めな
くない！？おかしいって！カップルならわかるけどね！？」

「……モカは極度のブラコンだし」

「は？」

シロップの発言に耳を疑う。だってこの人Sじゃん！

「シロップ、それ以上いうと時限爆弾と一緒に宇宙に投げ出すよ」

「物騒なこというんじゃないや！！」

「そしたらモカを漏れなく道連れにするよ」

「シロップう！？」

ヤバイ。怖いよ、君たち。恐ろしいから。すごい怖いから。なんなの
のいったい。

コナが目を覚ました。

「しろつぷ、しぬときは……」

「ん？」

「ぼくもいつしよに、しぬから・・・」

「ちよつとオオオ！！！会話が危ないイイイ！！」

いや、なんでコナまでこんな物騒なこと言っただよ！どついう教育したんだ君たち！？

「おい、紅誇」

「え？」

「アイスピーチティー作ったけど」

アーモンドがピンク色の液体がたっぷり入ったグラスを差し出してる。今気付いたけど、ホームパーティーにきときながら、あたしまだなんも飲んでなかった。

「ん、ありがとう」

仄かな甘みが鼻をくすぐる。うん、おいしいこと決定。

コクン。飲んでみるとまた新しい味がのどに広がる。

喉渴いてたから余計に甘い水玉が喉を転がってるのを感じる。

ピーチの味が甘苦く口を潤す。

・・・いやいや、何超枯渴してた人みたいな解説してるんだ。いや、一応枯渴はしてるんだけどね。

「うまかったか」

「うん」

「そりゃよかった」

「ねえあなたたち、みんな俺のこと忘れてるよね？」

「・・・へ？」

今、聞きたくない声が聞こえたような。なんとなく、嫌な記憶があ

るようなないような。

そう、この声は、今たぶん一番出番のない……

「潤風ウウウウウ！！！！！」

「何、そんなに俺に会いたかったの？」

「んな訳あるかこの人殺しイイイイ——！！！！！」

うわ、なんでこんなとこにこいつがいんの？！こいつ前ピラニアにあたし食わそうとしたんだよ？！ギャー、逃げていいっすか？！いいっすか？！

それなのによくも「会いたかったの？」とか聞けるなこのアホ！どいう神経してる！

「なあに、このロリコンとお知り合いなの、お姉ちゃん」

「ロロロロリコン？！」

「うん。こいつロリコン」

変態だ！！絶対Sだとは思ってたけど変態だ！！

「ろ、ロリコンS男——！！！！！」

「やだな、人聞き悪い」

「悪くて当然だ早く立ち去れ！！こんなロリシヨタパラダイスから早く出て行け！」

「ひどいなあ紅誇さまは。この間は俺のおかげで王子様に助けていただけなんていうロマンチックな演出を味わえたのに」

「頼んでねーよ！っ！か攫ったじゃんお前あたしのこと！おかしいだろもうちょっとで死ぬとこだったんだよ！」

コイツ相手だとどうしても攻撃したくなる。ってか、しないと気が済まない。殺されかけたし。

「べつにいいでしょ」

「いいわけあるか！」

なんていうことをいうんだこの狼は！！クレイジーめ！

「・・・・・・・・・・気狂い」

「・・・・・・・・・・ロリ魔」

「・・・・・・・・・・え」

いやいや、今のは聞かなかったことにしよう。モカとカプチーノが
すっごい怖い顔でクレイジー狼を睨んで（ガン見？）いたことも全
部目逸らしで。これ以上この世界に怖い人が増えてほしくないし。

（こつちが本音）

「みんな酷いな、ねえアーモンド公爵？」

馴れ馴れしくアーモンドに触れるクレイジー狼。

「まあ多少はもうちょい仲良くしてもいいと思うけどな。けどこの
ロリータコンプレックス狼。お前も少しはそのSなことかロリコ
ンとか極度の常識外れとか、考えた方がいいんじゃないか」

「アーモンドは優しいなあ」

「・・・・・・・・お前、人の話聞いてないだろ」

あたしとアーモンドのダブルツツコミ。

「でも貴女もそのM属性直した方がいいと思うよ紅誇」

「何故？！あたしはマゾになった覚えはないけど！？」

何を言うんだこのクレイジー狼は！！！だれがMになった？！

「いや、貴女は十分Mだ。どこかと言えば普通に猿轡されても反抗

しなかったところとか湖に捨てられそうになっても動かないとことかすぐ押し倒されちゃうとことかかな」

「知るか！だって猿轡に葉しみこませてたし湖の件は後ろからお前が押したんだろ！押し倒したっていうかお前が上から降ってきたんじゃない！」

「・・・そんなことしてたのクレイジー」

「・・・信じらんないもう紅誇が可哀想」

ざつ。あたしとクレイジー狼の間に双子が立つ。背格好が同じでかつこいい。

っていうか、背があたしより高いんだよな。いいなあ。

「乾いたモヤシのように世間のかどで生きろよ」

「一生僕たちの前に顔を出すんじゃない」

一歩二人が踏み出す。地鳴りのように地面が揺れた気がする・・・

ええ、ちょちょっと待て、だから最近なんであたしはこんなに冷静なんだ！？地鳴りだよジナリ！おかしいでしょ！しかもこれから何が——？！

「死ね」

「ギヤアアアアアア！……！……！待て待て待て！早まるな！うわあ
ああ！まてええええ！……！」

その日あたしは、ボロボロになって二人の暴走を阻止した。初めて
Mな男が人を殺そうと（うわ）する現場を見たと思う。
これから、クレイジー狼とあの双子が一緒にいるところを見たら一
目散に逃げ出そうと決意した。

第15話 裏双子（後書き）

うわー、死の影がちらついちやいましたよ。
そろそろ、女王様を出さないと・・・

第16話 女王様

「はぁゝ・・・」

部屋であたしはひとり、ため息をつく。

「今日もひ「お姉さんッ」

ボタン！！！！

「・・・・・・・・・・ココ君」

入ってきたのは、綺麗な金髪の猫耳少年だった。うん、あたし慣れた。不法侵入には。・・・うぁ？！ダメだよあたし！こんなのに慣れたらいけません！

「お姉さん、女王様の謁見に行きませんか？」

「あ」

忘れてた。そうか、あたしまだこの国の超権力者、一応ココ君の話から行くとお義母さんとなる人に会ってもいなかった。

「うん、行くよ」

「よかった」

そんなわけで、あたしは今、迷路みたいな廊下を歩いている。

っていうかさ、廊下のいたるところにナッツさんの肖像を掛けないでほしいんだよね・・・！！落ち着かないから・・・！！

あ・・・銅像見つけたかも・・・

「え——！！ちょっと！誰？！こんなとこにあたしの銅像
置いてくの！？」

いや、気付くのが遅かっただけらしい。

よく見てみれば、よく兜とか鎧が置いてあるところにはぜんぶナ
ツツさんの銅像やら彫像やらがバンバン置いてあって、いやいや、
困るからねそういうの。

「遅いですよ、お姉さん。でも、そろそろお母様の書斎に着きまし
た」

「え？！嘘早！」

超早い！っていうか、意外だなあ。もつと城の奥深くとかにあるの
かと思つてたのに。

「お母様」

ノックをするココ君。

「入っていいですよ、ココ」

うわ……。綺麗な声。透き通るようなメゾソプラノ。聞いててと
ても気分がよくなる。鈴を転がす、とはこのことなのかな。

キィ……。ドアをすつと開けてココ君が入る。

続いてあたしも入っていった。

書斎の中央にある椅子に腰掛けていたのは——。

「……………わぁ……………」

声が、出ない（出てます）。

凄く綺麗。美しい、というか、むしろ可愛いに近い。

銀杏のように丸い瞳はココ君に似たウルトラマリンプルー。つややかでゆるいウエーブを描く長い髪は繊細なレモンイエローペールで、肌は透き通って白に近いシエルピンク。

身長は低めであたしとそんなに変わらないのではないかと？（そんなことは有り得ません。本当は155くらい）

どちらかというと女王よりも容姿は姫に近いかな。

可愛く微笑む小振りでライトマゼンタ・カラーの口元は彼女の可愛さをよりいっそう引き立てて——って！

なにこんな行数使って女王様の説明してんの！？おかしい！

「可愛い、ですね」

「なに——」

え？今、この人あたしの事可愛いとか言った？え？！いやいや、貴女の方が何万倍、いやなん億倍も可愛いから！えー、ちょちょちょと、マジで常識無！

「ピンクマダーの真ん丸の目元、健康的なジョーンブリアンの肌、薄いローズバイオレットの髪の毛・・・うん、気に入りました。わたくしより可愛い人はいないけど、そうね、世界で二番目に可愛いです」

・・・・・・・・・・・・・・・・ん？

今この人なんだった？

ワタクシヨリカワイイヒトハイナイケド

え、まてまて、脳内の整理させて！いや、うん、これはもう妄想の範疇ということで構いませんよ！あたしは構わないから！って言うかほっといてくれエエエエ！

「え、えと、ありがとうございます」

「嫌ですよ、もう。わたくしに敬語なんて要りません」

現にあなたが使っているのに。

「わたくしのことはベリーと呼んでください。あなたは・・・紅誇、でいいかしら？」

「え、は、う、うん。えっと、ベリー」

「フフ、可愛い。紅誇、これからはずっと一緒よ？帰れないしね、貴女は」

帰れない。

そうか。あたしはそういえば、逃げ道がないんだ。

帰れる家がないっていうのは、こんなに不安なのかな。

「なんていうか、標本にしたいくらい可愛い」

感傷的な気分をぶち壊すベリーの言葉が・・・！

「ツギヤアアアアア！いや、マジでやめてください！でかい画鋏とか持って追い回さないでね？！」

「え？それってこれのこと？」

女王様がどこからともなく出したものは、超巨大な細く怪しく光煌く金色の画鋏。優にあたしの身長くらいはありそうな――

「怖ッ！っていうか何でそんな危険な物体を持ってるんです？！塩酸で溶かす実験に使うよ！えー、うわ、だから危ない！きゃー！！振り回すな——！！！」

「うふふー、凄く可愛いー、あなたもそう思いませんか、ココ？」

「ヤバイです、お母様！危ないですから！！」

よし、その調子だ、ココ君！

「何言ってるの？いつものお茶目な冗談です」

「お茶目じゃない！！！」

え、マトモだね？このツッコミ、マトモだね？！

「あらなんで？たのしいじゃない」

「怖かった！心肺停止で死にますから！夜とかこっそり入ってきて朝になったら剥製とかやめてくださいよ！？燻製も嫌ですから！！」

「あら、それいいですねー」

「にゃー！？」

「冗談」

「お母様、マジでやめてください……」

「あら、ココまで面白くない……もっとお茶目なのにした方がよかったかしら……？」

「ベリー、我が家に帰らせていただきますねッ」

「え？だから帰れないですから。」

「やめてもらわないとあたしの命が帰れない！！！」

うわー、チョー危険だよ。マジでやばいから！何なのこの国！ってか、女王様これで国の運営ちゃんとできてんの？！

「また遊びに来てくださいね、紅誇！今度はもっと楽しい冗談を考

えて待っていますから」

「一生来ないことを胸に誓います」

第16話 女王様（後書き）

女王様の紹介は、次回あたり書こうと思います。

第17話

HAPPY

WEDDING!!!(前書き)

ちよつとヤバイ事実が判明します。

「頼るか！また殺されそうになるじゃん！」

「まさか。あれは俺の善意だって」

「どこが?!」

うん、いつにも増してクレイジーでデンジャラスなやつだ。やばすぎる。思考回路を誰か直してやってください！

「ほら」

それだけいうとクレイジー狼は飛び降り、立ちすくむあたしをひよいつと横抱きして飛び上がる。

「またこのパターン?!」

「いっくよー」

ひよい、ひよい、ひよい。垣根をホップステップジャンプしながらこのクレイジー狼は500メートルはあるつかという迷路をずんずん進んでいる。

「まだこんなしか行つてなかったんだ・・・」

潤風がいてよかった。・・・ん? いや待て、何言ってるんだあたしは?! こんなやつがいて良いわけ無いでしょ!

「つて、おろせバカ!! あたしは町に用事があるんじゃない!!」

「そっちの方が好都合。俺も町に行きたかったし♪ね、デート♪♪」

「んなことするか! 早く降ろせつたら!!」

「仕方ないなあ、お姫様は。白の王子に失礼すぎない?」

あたしが潤風に降ろせばっかり言つてると、さすがの潤風も文句をぶつぶつ言いながら降ろしてくれた。ザマミロ、クレイジーめ!!

その後クレイジー・デンジャラス(潤風のこと)はヒューンと空高くに飛び上がって町のほうに行ってしまった。この国の人はみんな空が飛べるのかね?

「・・・って言うわけなんだよ」

「うそ、うるつぴが?！」

「すごおい、好かれてるんですねっ!」

「仲良し、ですー」

今、聞いてはいけない単語を聞いたような気がします。

「・・・うるつ・・・ぴ?」

「んあー?潤風のこと」

「つてか、仲良いの?！」

やばいぞ、最近の教育は!あいつは18歳まで閲覧禁止にしないと
いけないのに!いやむしろ、全年齢閲覧禁止にしてください!危な
いから!!

「・・・うん」「」

うわぁ・・・最近は残酷な時代になったものですねお父様、そう
だな紅誇よ。

な、何故にこんな可愛い子達があのだSロリコンと仲良いのだ――

!!はっ、もしや・・・!

「ちよちよつと三人、あああいつに喰われてない?！」

「えー?」

・・・そう、今気になるのはこの子達の安全です。同年代のくせし
てあたしよりも童顔で背も低いからね。あいつの好みそうな子達。

「バカだなあ、紅誇は。俺はもつと純情だよ」

「え．．．．．」

うん、聞きたくない声ナンバーワンだ。

「でででで出たアアアア！！！！」

ギャー、潤風！何故ここにいるんじゃ！

「ただだ誰か、たた助けてエエエ！」

もう絶叫。しかも当の潤風はのんきにピーチに後ろから抱き付いて、頭に顎を乗せている。

「ちよつと、ピーチ逃げて！熊と狼の相の子ができちゃうよ！恐怖だからアアア！！」

でもピーチは逃げる様子も無い。えー？なんですー？みたいな顔でこつちを見つめる。うお、可愛い！でも、今は危機感を持とう。危ないぞ、その後ろにいる奴が。

「ハア——．．．紅誇姫、ピーチ嬢は俺の奥様だよ？」

「．．．．．」

「潤風はあたしの旦那様ですよー」

「っキヤアアアアア！！教育方針狂ったアアアア！！！」

いやいやいやまで、この子あたしと同年齢の14歳だよね！？ちょいまち、おかしくない？！法律無視だよね？これって法律無視だよ

ね！？

「ピーチずるいよねー」

「潤風様かつこいいですのに、14歳で奪っちゃうなんて酷いですよー」

「反応ちげエエエエー！」

やばいぞやばいぞ、まずいことが発覚した。犯罪の匂いがします！警察、ヘルプミー！ヘルプミイイイイ！！

「・・・で、それは嘘だよね？」

「ほんとーですー」

「が・・・つくし」

最後の望みを絶たれた・・・いや、変換間違い、最期の望みを絶たれたでした（死ぬの？！あたし死ぬの？！）。

「さーと、紅誇、もうそろそろ6時近いけど？」

「嘘！帰んなきゃじゃん！だからこのドームやなんだよー」

そそくさとあたしは帰り支度を始めた。

「ピーチ！クレイジー！」

「それは俺のことかな？」

「モチよ！結婚してるっていうのあたし納得してないんだから、今度詳しく教えなよ！」

「はいですー」

「そんなの待つ必要ないよ。俺が教えてあげる」

そういうとまたクレイジーはあたしをお姫様抱っこ。

「ちちよっと、ピーチっていう可愛い嫁がいながら何してんだボケ！」

「いいじゃん。いいよね、ハニー？」

「はい、いいですよー、ご主人様ー」

人のいい笑顔でピーチは微笑む。・・・絶対新婚だな、この二人ハニーとか呼んでるよ。ご主人様とかマジで可愛いんだけど。

「ね？」

そのままクレイジーは飛び上がった。

「・・・ギャ——！！！！や・め・てエエエエ！！」

「じゃあ、俺らの馴れ初め話するねー」

「今?!」

「えーと、なんか教室で二人だけになっただけになっただけに急にキスしたくなつてー、したらピーチが『番つがいになります?』とかいうから、まあいいかなーと思つてー、2週間後に結婚式挙げたーみたいな?」

「ざけんな。年頃の女の子にいきなりキスすんじゃねー」

「仕方ないじゃーん 〴〵いつもは押さえてる欲情を抑え切れなかったんだもん でも、襲わなくてよかったよ」

「そしたら今頃あたしはお前を殺している」

「この間初体験したけど〴〵」

「クロス!!!!」

なんだと?!じゃあえー、うわ、想像すんのも恥ずかしいわ。コイツ・・・・!!

「ちがうちがう。だからー、結婚届の初体験!」

「別の意味で殺すぞオオ!」

うわー、違う羞恥が襲ってきたよ!!やめて、これじゃあたしが変態だと思われるじゃん!!

「ま、君は変態でマゾだからねー」

「だからマゾじゃないから!どっちかっつたらサドに近いから!」
「やっぱ変態なんだ」

「ちげエエエエエ！」

そんな感じに、ヤバヤバな馴れ初めを聞かされたあたしは、啞然としてたけど、彼の話は楽しそうに続く。

「ちなみに結婚したのは2年前だよ」

「うそ！それで“ハニー” & “ご主人様”！？」

「いいじゃん♪可愛いし」

「ハニーとかきしよいわボケエエエエエ！！！」

しかもピーチにしても簡単に「ご主人様とか言うなよ。メイドかつての。しかもなんか『番^{つかい}になります？』とかいうしさ。危機感な！！！」

そんなこんなのうちにお城に着いた。

「うーん、なんかちよつと強引だった気もするけど、ありがと」

「お礼を言っただけで光栄だね」

「“ハニー”、大事にしなよー」

「わかってるし」

あたしたちは、手を振って別れた。

ちよつとだけ……中身がわかった、かも？

第17話

H A P P Y

W E D D I N G ! ! ! (後書き)

まあ、紅誇は住人さんの新しい事実を学んだんですよ。

いや、やりすぎですかね？

次回は多分、平安貴族たち殿の出番が回ってきます。最近潤風さんをもっと出さねば！！と思いいバンバン出していたら出まくりなのでこれから3回ほどは出さない予定でいます。

もしもこの変態ロリコンが大好きでもっと出してください！という方がいましたら、言ってくださいませ。しっかり出します故。

あと、もっとこの人たちを出しまくってくださいという要望があったらおっしゃってください。しっかりと組み込みまくりうと思います。

ではでは、ありがとうございました。

第18話 平安貴族と夜のベッド（前書き）

ちよつと、ヤバヤバで脈絡のない話になってます・・・

第18話 平安貴族と夜のベッド

「う〜ん」

あたしは、明るいい日差しの下、のんびりと伸びをする。

ただいま、平安貴族様のお屋敷におります。

「紅誇さまー、歌を詠むのがお上手になりましたねー」

隣には、奏唄がさかずきを持って座っている。今、あたしたちは藤原道王さんたちと一緒に曲水の宴をしている。今あたしは、ちょうど句を詠みおわったところ。題材は揚羽蝶。あげはちよう難しかったけどね・・・。

「紅誇殿、わしらと一緒に蹴鞠をやりませぬか」

古！！！！今日もいつにも増して古いよ！わしとかいった！みんな美形で王子なのにそんなセリフ言わないでよ！

で、それはおいといて・・・

「蹴鞠？でも難しいじゃん」

「大丈夫じゃ。一緒にやろうぞ」

「だから古い！」

ヤバイ。あまりにも古すぎて声に出してしまった。

でも、あたしを誘った人は、気にも留めずにあたしを引き摺りながら、蹴鞠をさせに・・・

「ちよつと・・・おい・・・」

ダメだ。聞いてないな。あたしは諦めて、そのままになっていた。

うん、さすがに腹が立つね。

え？なにがつて、だって、蹴鞠がむずすぎてさ——！！

皆様ばんぼんボール蹴り上げておほほ。あたしの方に飛んできて、

ああ——。頭にぶつかって、倒れ伏しました。

「紅誇殿！！申し訳ございませぬ！大丈夫か？！」

さあ、どうなのでしょうねー。だんだん意識が遠のいてあは、もう世界が見えないや——。・・・

あたしが目を覚ましたのは、その1時間後だったという。

「むう、う——ん・・・」

伸びをしてそこから起き上がる。ん？なんか・・・お香のにおい？

頭からぬれた布が滑り落ちて、手を横に伸ばすとザラツとした感触が・・・ここはどこ？

辺りを見回すと、畳が一面に敷き詰められてなんか、室町と平安の真ん中？えーと、とにかく微妙な感じです。

「・・・奏唄の家？・・・だろうな、うん」

ぐつと足に力を込めて立ち上がる。冷たい濡れタオルが滑り落ちて、ああ、服がぬれるなー。ちなみに今日はもともとここに来たいと思っていたので和・洋両方が組み込まれたフリルのドレス。短めでレース足袋を履いて足の疲れないシルク生地をふんだんに使った木製ぽつくりを履いてなんとなくコーデイネイト。うん、まあ派手なっただけ。

「あー！紅誇さま、目が覚めましたか！」

「え？」

奏唄だった。小さめの黒塗り桶を抱えて、あーあ、おなかの辺りの十二単がびしょびしょだよ。いいのか？

「いけませんよ、すぐに立ち上がっては」

「ごめんごめん。っていうか、あたし蹴鞠で頭に鞠が当たって安らかに気絶したんだよね？」

「はい……」

「いやいや、気にしないでいいんだよ？ 奏唄のせいじゃないし」

「……ほら、もっと安静にしていなとたんこぶができますよ」

それを聞いてあたしは急いで布団に入る。だっておでこにたんこぶなんて恥ずかしいじゃん……。

「うふふ、可愛いですね。とにかく、少し休んでいてくださいね。」

あと、貴女にボールをぶつけたあの方、謝罪しました」

「あ、別に平気だからって言うといて？」

「はい」

奏唄にいうと、もう一度あたしは目を閉じた。

「………むっ」

目を覚ましたとき、外はもう真っ暗だった。

「ん……ここ、どこだ……」

周りを見回すと、そこはなんだか見慣れた場所。寝惚けてはつきりしない記憶を手繰り、ここがお城の中のあたしの部屋だったことを思い出す。

「なんで」

「あ、お姉さん。目が覚めましたか♪」

「わ！」

急に声がしてびっくりしたけど、この声はココ君だ。

「な、なんだ・・・えっと、ココ君。あたしは何故ここに？」

よく考えれば鞠をぶつけたところに冷たい保冷剤がついてるし痛みも引いて心地いい。

「奏唄からお姉さんが眠っておきないと連絡がありまして、すぐ迎えに来ました。抱いて帰ってきましたよ」

「・・・」

それは恥ずかしい。寝顔めっさ見られてたって事だし。

「もう、お姉さんてば寝顔が綺麗で見とれちゃいましたよ」

「え?!ちよちよっと何言ってるの?!あたしみたいな心真っ黒人間が綺麗だなんて何をおっしゃる!」

「何言ってるんです?お姉さんはとっても綺麗で、素敵でしたよ?」

・・・ブラックリストに入れるようなのかな、この子。
キザいことばっか言って、意外と女たらしなの?

「さあ、お姉さん。一緒に寝ましょう」

「うん一緒に・・・え?!一緒に?!ただだダメだからねそういうの!」

「なんですか?いいじゃないですか。お姉さんと一緒に眠りたいんです」

「っていうかさ、キミ注がれた愛情に飢えてますみたいなこといっ

て意外とベリーと仲いいよね」

「当たり前じゃないですか。お母様は本当のお母様ですから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

「ですから、公爵夫人とかが王位についたあと、その2年後にひよっこりお母様たちは帰ってきたんです。そのとき公爵一家は王座をお母様たちに返してどこか行きました。2人は無傷で帰ってきたんですけど、お父様は不治の病で他界してまあ一応お母様が王になっているのですよ」

「なななな、なん・・・！騙したなこのキザ猫少年——！！！」

「騙したなんて失礼な。僕はどうしたかは知らないといったけど、あれ以来帰ってきてないって言ってますし」

「同じだろ！」

「まあ、平気ですよ」

「なにがじゃボケエエエ！」

「ぼ、ボケなんて・・・！お姉さん・・・！」

うるうるうる。ますます彼の目が潤む。あたしは、慌ててなだめはじめた。

「ちよ、ちよつと・・・！泣かないで、ごめんね？ね？」

「じゃあ一緒に寝てくれます？」

「話題逸らせたと思ってたのにイイイイイ！！！」

「残念。僕は貴女を諦めるような野暮な王子ではありません」

「そんなセリフ言っても無駄だからアアアア！ちよちよちよつと！！！！待て待て待て待て、落ち着いて、ベッドに這い上がってこないで、ギヤアアアアア！！だ、だれかああ、襲われむぐう！！」

こ、この少年！！！！前々から力あるなとは思ってたけどこんな力があつたとは・・・！！いや、窒息するからその力で口ふさぐのやめて？！

「・・・叫ばないでくださいよ」

「むづづづ！ふづづ、むむむうう！」

「・・・叫ばないから離せって言われてもですね・・・その声じゃ納得いきませんけど・・・まあ、いいです」

手を離してくれる。ふう——。窒息死するところだった。

「はあ、はあ・・・もう一緒に寝てもいいから襲ったりしないでよ」

「やりません・・・・・・多分」

「なんでそこで曖昧なの？！」

その夜、あたしのベッドは波乱万丈だった。隙あらばココ君はあたしに絡んできー（これ以上やると作者のせいでR指定になりそうなので退場します）。

まあ、そんな感じで、明日は腰痛が激しくなりそうです・・・。

第18話 平安貴族と夜のベッド（後書き）

す、すみません！！ちゃらちゃら遊んでいたら女王様の紹介を忘れておりました・・・！！

ベリー＝ナツ・パーム（女王様）

13歳

血液型・B

かなりの自身やで、自分が世界一可愛いと思っているらしい。声は透き通るようなメゾソプラノで、瞳はウルトラマリンブルー、髪は透き通った質のいいレモン色。容姿は姫に近い。

好きなものは自分と自分と自分と可愛いものと紅誇。ちなみに2：2：2：1：3くらいの割合。嫌いな物は自分よりも高飛車なものと甘くないもの（ココ君のあの甘物好きは親譲りか・・・：紅誇）。体重・？（女王様なので自分の思い通りになって、体重も誰も知らない）

身長・156・8センチ（うん、なんでこんなに成長するんだ？：紅誇）（紅誇嬢は小さくても可愛いよ：潤風）（で、でたあ、クレイジーSロリ魔！！女王様、早くコイツを制裁して！！：紅誇）

はい、ココのキャラ崩壊が激しくなっています（え

初めこの子は誠実でフェミニスト設定だったんですよ・・・！！！なのになんでこんなふしだらな子に・・・（泣

ちよつと最近あたしは自分を自重した方がいいですよ。アリスの方も意味不明になっているし・・・っていうか、自嘲しましょう（マゾ？！

冗談はおいといて・・・とにかく、前回はのんびり平安の遊戯みた

いなCMしといてなんだよみたいな話ですが、いかがでしょう？

・・・とにかく！！！！次回は絶対にホームパーティ出しますよ！もうしょうがないので一番書きなぐりやすいメンバーをd（退場したまえ

ではでは、停滞気味になってしまいかもですが来週中に絶対二つは更新したいなーと思っておりますのでよろしくお願いいたします！

第19話 寒い海と温かい人（前書き）

ものすごくおくれてもうしわけございません・・・！

第19話 寒い海と温かい人

今あたしは、あのながーいながーい道のりを歩いた先の、お茶会場にいる。

「紅誇。今日はなんだか大胆な格好してるんだね」

「ちよっ！モカ、そんなこといわないでくれよー！！！」

ちよちよっと、初っ端からすごい発言をしないでほしい。でもまあ、あたしを見れば仕方ないよね。

今あたしは、お腹とか肩とか、いろんなところの見えまくるビキニ系の格好をしてる。いや、ビキニだよ。正直に言っちゃったけど。胸のところにでっかいリボンがついた青い水玉のビキニだよ。その上に薄っぺらい上着羽織ってるだけだからちよっと潮風が寒い。

「でも、なんでそんな格好してるの紅誇？」

「いや、ここって海のすぐそばでしょ？だから泳いでみたいなーって思っ」

「ちよっ……バカかお前？！まだ泳ぐような季節じゃないだろ！」

え……アーモンド、バカは酷いよバカは。それでも数学の成績はクラスでも上位なんだぞ。英語は自重したほうがいいくらい悪いけど。

そのとき、あの可愛い声がした。

「むう……くこ、およぐの……？」

「コナくんっ！！！！お姉さんは嬉しいよ！今日は起きているんだね！！！！」

「およぐ？」

「うん、そのつもりだけど？」

「なんか紅誇って、コナとか年下に接するときだけ猫撫で声になるよな」

「なんか言ったかな」アーモンド君？」

机の下で、足のやり取りをした（あたしがアーモンドの足を力いっぱい踏みつけただけ）。

「たたくもう、冗談じゃない。猫撫で声なんて人聞き悪いなあ。

「ちょ、紅誇、怖い！！顔が怖い！！！！」

「黙れアーモンド。今すぐ黙れ」

凍るような目線（自分で言う）で睨めつける。アーモンドは、恐怖の表情で、まるでメドゥーサにでも睨まれたように固まった。

まあ、そういうことはほつといて。

「泳ごうと思ってるけど」

「じゃあ、ぼくもー」

コナ君は、突如そういうと、うーんと伸びをして、今までの動きからじゃ思いもよらない俊敏な動きで立ち上がった。

「え、ちょ、コナ君？！」

「およぐじゅんびしてまってる」

それだけ言うと、コナ君は勝手になんかすたすたログハウスの中に入ってっちゃった。え、どーゆーことなの？状況に頭がついていないんですけど。

「・・・えつと」

「あのね、紅誇。コナは、お菓子以外は何にも興味は示さないけど、ひとつだけ、泳ぐことだけはなぜか大好きで、すっごい泳げるんだ

よ」

「……ほんとになんで？訳わかんないですけど。」

しばらくしたら、コナ君が稀にしか見れないぱっちりしたココア色の瞳を見開いて、水着姿で出てきた。ヤバイ、微ワイルドで超可愛い。

「およご、くこ」

あたしは、啞然としたままなぜかすごい力のコナ君にしょっぴかれていった。

あの、すいません。ガチで困ってます。なんでこんなに寒いんですか。

「ここここコナ君あああたしももうげげげ限界なんですけど……！！！」

「なにいつてんのくこー。これからだよー」

今あたしは、コナ君と一緒に海に入っている。あたしって体強いし、寒いのか超平気。ちよつとくらい寒くったってよゆうつち。と、思ってた。

でも実際、あたしはこの季節の海をナメてたと言えるだろう。

陸は、ちよつと肌寒くて、でも海入っちゃえば大丈夫って思ってたし、泳げるし♪と思っていたけれど、実感した。ここの海、超寒い。

「ばばばばかじゃないのこの水温……！！！」

寒すぎて舌もまわらないっつーの！いつ足攣ってもおかしくないじやん……！

なのに、それなのに。

コナ君は、きやらきやらいつもじゃ絶対見れないキュートな笑顔をさらしながら、この寒い海を余裕で泳ぎまわっている。あたしの心臓がふるふる震えているのは、そして身体におかしいほどの震えが走るのは、コナ君のその希少価値の高い元気な笑顔を見れた感動からではないだろう。

「あああがろうよコナ君……」

もし、もしもだよ？あたしの足が攀ったなら。そして溺れかけたなら。コナ君は、いくら泳ぎが得意と言ってもあたしを助けることなんてできないだろう。ここはコナ君の強い意志によりおとずれた水深がすごく深いところ。すでに岸とは何十メートルも離れているしあたしは自分の保身もできない。「海に帰る」とか、そんなロマンチックなことを言ってる場合じゃない。そんなの断る。まだあたしは若いんだ。

そんなことになる前に。せめて、暖かい場所へ帰りたい。

そのとき。コナ君が不安げにあたしの顔を覗き込んだ。

「どうしたの、くこ。かおいろわるいよ？」

「ううん……」

ふつと景色が暗転した。と同時に、右足に鋭い激痛が走った。あたしの意識は遠ざかり、海の深いコバルトブルーがやけに瞼の裏に残り

「ん」

目覚めは、最悪だった。水を飲んだのか、頭を打ったのか、やけに

意識もぼんやりしてるし今にも吐きそう。

「大丈夫か、紅誇」

瞼から力を抜いたあたしの耳に、心地よく響く低いアーモンドの声が聞こえた。

「アー・・・モンド」

「うん、意識は平気っぽいな」

あたしの額に手をあててアーモンドは呟く。

「ちょっと熱っぽいけど、しばらく休んどけば平気だと思う」

「アーモンド、あたし、どうなったの？」

少し間をおいてアーモンドは少し微笑んだ。

「急に冷たい水の中に入ったから、貧血っぽいのと足を攣るの両方同時に起こして、意識飛ばしたんだよ。幸いコナが陸までつれてきてくれたけど」

「は・・・」

なんか、コナ君を過小評価してたみたい。あたしがだめになっちゃっても、コナ君は助けてくれた。ごめん、コナ君。

「とにかく、お前は明日までしっかり休んで睡眠もとって、養生すること！お城には俺のほうから連絡入れとくし、安心しろ」

「え、そんな・・・もう他の人に迷惑かけらんないし・・・コ君にも心配かけたくないし」

あたしは、そういつて、ぱっと立ち上がろうとした。立った、思ったら、くらくたとして、またベッドに座り込んでしまった。

「馬鹿か、お前。無茶すんなよ。城かえるまでに倒れられた方が困るし、こっちは迷惑してないから。部屋とかも十分余ってるし。まあ、そんなに気にするなら、明日帰ってからココにしっかり叱られて、謝つとくんだな」

「……………うん」

あたしは、ぐらぐらする頭を押さえながらアーモンドに支えられてまたベッドに横たわった。

思えば、そのとおりかもしれない。こんな最悪な状態のまま帰ったら、途中の道のりでふらつと倒れてしまうに決まってる。

「あ、そういえば、ここはどこ？」

「ログハウス。空き部屋」

「さすがベリーの国。ちょーイチゴのにおいしてる」

「芳しいだろう」

「……………ん」

アーモンドに言われて、胸いっぱい苺の芳香を吸い込んだら、ふつと睡魔が襲ってきて、何分もしないうちにあたしは眠りに落ちてしまった。

「……………寝たか」

アーモンドは、すーすー寝息を立てるところかあどけない紅誇を見て、微笑んだ。

「いい夢を、紅誇」

紅誇の額に、そっとキスをするとアーモンドは部屋を出て行った。

「んーん」

目が覚めると、自分の寝ていた部屋にお日様の光が差し込んでいた。窓際には、背の高い青年のシルエツト。

「・・・・・・アーモンド」

「あつ、わり、目、覚めちゃった？ 眩しいかなと思って迷ったんだけど」

「うっん、平気。もう起きる」

身を起こすと、昨夜のぐらぐらした不快感や吐き気が消えているのがわかった。

「大丈夫そうだな」

額に掌を当てたアーモンドが微笑む。

「ん、介抱ありがと。おかげで治った」

「よかった。でも、念のため俺、城まで送ってくから」

「うん、ありがとね」

着替えやらいろいろ済ませてから、あたしたちはお城に向かった。この間知った近道を通って、お城に着く。お城の裏口では、ココ君がそわそわと待っていてくれた。

第19話 寒い海と温かい人（後書き）

はい、もー今まで以上に意味のわからないものになってしまいました
た・・・すみませんっ！

おいおいガリーアリスも更新しますので、どうか見捨てないでや
ってくださいませ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8832e/>

紅の姫君

2010年10月28日08時07分発行